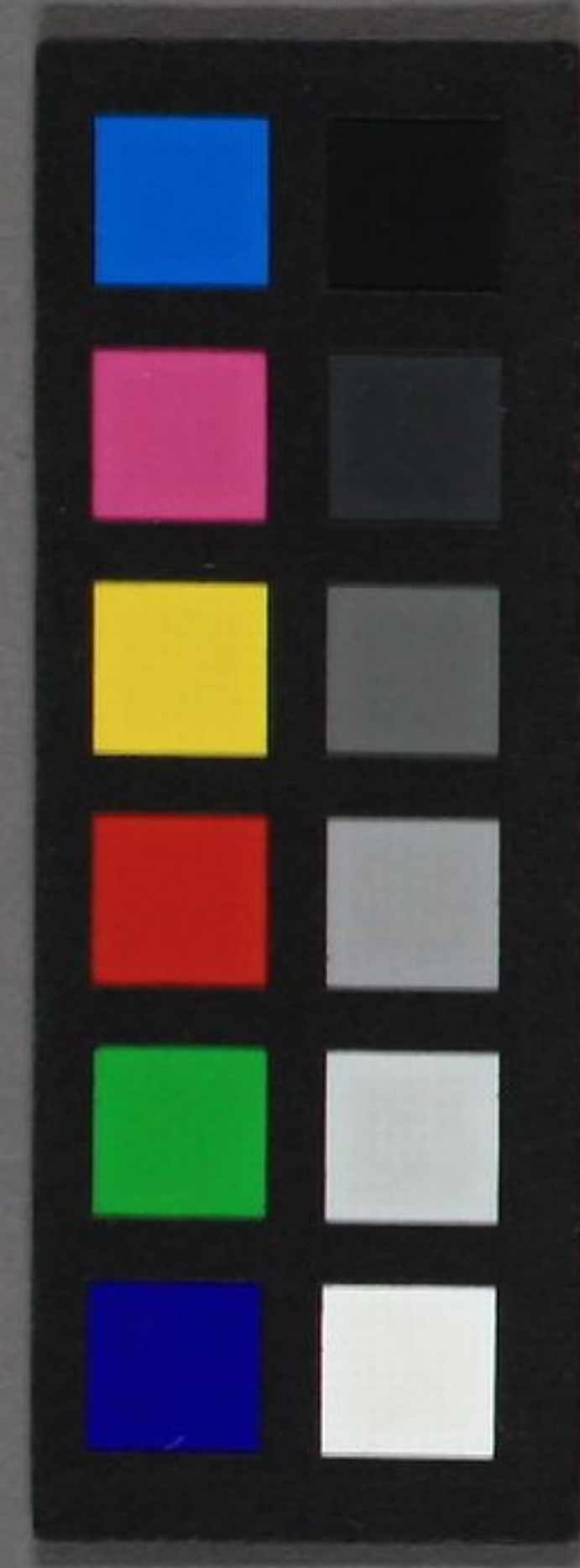
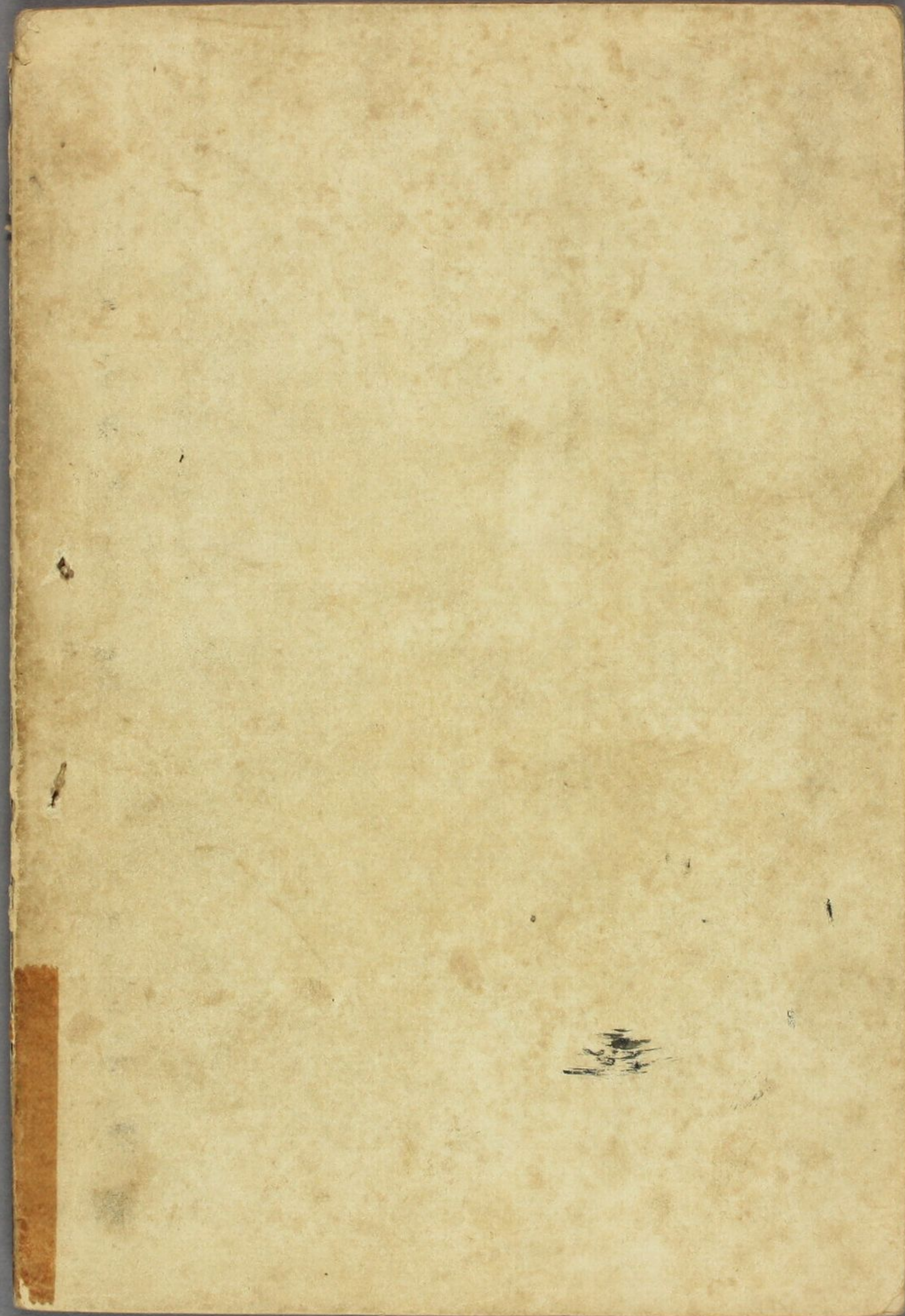


香







墳墓

新聲社匯刊

墳墓目録

第一 墳墓とは何ぞや……………一

總叙——墳墓の意義——アーピング——死と出産——クレ
の悲歌——哀性に就いて

第二 墳墓と薄暮……………一三

夕暮——薄暮の光景——メインの説——古詩の例証——鳥聲
と鐘の音——靜御前の墓——墳墓と薄暮と一致する理由

第三 陵墓の沿革……………三一

叙論——太古——神武時代——殉死——氏族制時代——國造
磐井の墓——大化改新時代——平安朝——鎌倉時代——室町
時代——徳川時代

第四 死と墳墓……………四三

死亡と墳墓——死の種類——バウルゼンの説——名歌一篇

高橋野馬

過失より來る死——他殺の慘酷——自殺——自殺月別表とその方法

第五 墳墓と偉人……………五二

偉人とは何ぞや——カールライルの英雄崇拜論——偉人の墳墓——バウルゼンの死後の事業に關する説——バイロンの華盛頓——小野古道の歌——小楠公の墳——結論

第六 無縁塔……………六四

無縁有縁——無縁塔の由來——郊外の散策——無縁塔の觀察

第七 墳墓と歴史……………七三

星移物變——坪井博士の説——墳墓調査の結果——歴史的觀察

第八 比翼塚……………八二

戀とは何ぞや——未來の夫婦——目黒の比翼塚——小紫櫓八

第九 月と墳墓……………九三

美文と漢詩

大江千里の歌——月色——青色の標示——墳墓——月と墳墓と調和する理由——近松巢林子の墓——一葉女史の別れ霜

第十 靈供塔婆……………一〇一

卒塔婆——閻伽の水——手向の花——位牌——高田道見の説——靈供——北村透谷の墳墓觀——結論

第十一 墳墓と詩人と……………一一二

詩人の辯——その觀察の方面——墳墓を撫して作れら歌——平和——セキスピアの墳墓——晚翠の墓上の花——墳墓の主人——ケリーの悲歌中の一節

第十二 墓畔の感慨……………一二三

墓側の光景——人世果敢なし——藤村の母を葬るの歌——柿本人麿の長歌——ケリーの歌——田山花袋の小暗き墓——山

過失より來る死——他殺の慘酷——自殺——自殺月別表とその方法

第五 墳墓と偉人……………五二

偉人とは何ぞや——カールライルの英雄崇拜論——偉人の墳墓——バウルゼンの死後の事業に關する説——バイロンの華盛頓——小野古道の歌——小楠公の墳——結論

第六 無縁塔……………六四

無縁有縁——無縁塔の由來——郊外の散策——無縁塔の觀察

第七 墳墓と歴史……………七三

星移物變——坪井博士の説——墳墓調査の結果——歴史的觀察

第八 比翼塚……………八二

戀とは何ぞや——未來の夫婦——目黒の比翼塚——小紫櫓八

第九 月と墳墓……………九三

美文と漢詩

大江千里の歌——月色——青色の標示——墳墓——月と墳墓と調和する理由——近松巢林子の墓——一葉女史の別れ霜

第十 靈供塔婆……………一〇一

卒塔婆——閻伽の水——手向の花——位牌——高田道見の説——靈供——北村透谷の墳墓觀——結論

第十一 墳墓と詩人と……………一一二

詩人の辯——その觀察の方面——墳墓を撫して作れら歌——平和——セキスピアの墳墓——晚翠の墓上の花——墳墓の主人——ケリーの悲歌中の一節

第十二 墓畔の感慨……………一二三

墓側の光景——人世果敢なし——藤村の母を葬るの歌——柿本人麿の長歌——ケリーの歌——田山花袋の小暗き墓——山

邊赤人の歌一首 — 大町桂月の墓畔の秋夕 — 田邊福麿の長
歌 — 古塚 — 歴史的聯想 — 不平の感 — 王陽明の詩 —
クレーの詩 — 墳の大小

墳 墓 目 録 終



第一 墳墓とは何そや

あだし野の露消ゆるときなく、鳥部山の烟立ちさらでのみ住
みはつる慣ひならば、いかにものゝ哀れは無からましを廻轉
は常に止まらず、朝の紅顔夕に桃李の粧を失ひ、昨日の鳳毛け
ふ空しく白骨とぞなる、歡樂とはいへども、春の夜の短かき夢

に似て、醒むればその跡はとらへんよしもなし。會ひにしとき
の嬉しき心は、離るゝ折の悲しきおもひに、いづれぞや。恩とい
ひ、愛といひて、人は果敢なき情の絲に、からめらるれど、若し一
たび死の魔神の斧に遭ひて、その半ばより打ち断たれなば、あ
はれ如何にかせん。泣くをやめよ、笑ふをやめよ、泪は畢竟心の
激したる餘瀝にして、罍は所詮氣の狂ひたる變相なり、誰かは
歎き誰かは荒む、この壺の中のやうなる小さき天地に、棲ひて、
などさる果敢なき心のおこるべき、月の夜は塵尾を手にして、
迷雲を拂ひ、風の朝は法衣を擲げて、痴霧を包め、一切清淨、一切
無垢、眼はさながら夕ぐれに輝く星の如くに、きらめき、心は潺
々と流るゝ、谷川のごとく清く澄むべし。あはれ世の人如何なれ

ば此の悟り易き行ひ易き弘誓の法を捨て、覺行究滿なる三
寶に反き、五逆十惡なる凡夫には近づんとする。明眸皓齒、きよ
くして瓊の如く、露を含める愛らしき眼ざしも、薔薇の花の匂
ふやうなる紅の口唇も、やがては一片の烟となりて、跡にのこ
るは灰と骨のみなる果敢なき世に、なかは愛着の念の残る
やらむ、やさしき妻も五障三從の女人と觀じなば、見るに醜き
惡魔なる可し、美しき子も娘も貪癩痴のおある源なりとさと
らば、瞳に映すさへ思はしき羅刹の姿と見ゆ可し。王位といひ
珍寶といふも、美はしきはろの名のみにて、實は見るかげもあ
らぬ馬前の塵、飄々として風の吹くに隨うて空にひるがへり、
紛々としてその何處に零つる行方をも認め得ざる可し。闕伽

にとて酌みし谷川の清水も、夕立にはさゝ濁り、手向にとて手
折りし花の紅の色も、やがては褪めて元どの素きにおろ歸ら
め、げに流轉輪廻のあら波は、小止みもなく五濁の世をうちて、
盛ふるものあれば衰ふるものあり、去歲は儻々として繁りた
りし銀杏の樹の、今年は幹枯れて葉を生ぜず、遂には風の爲め
に吹き折られしよどの果敢なきかな、生と云はば生なれども、
死といは、死とも云ひ得可けん、有るに似て有らざるものは
夢の浮世の、無きに似て無きにあらざるものは人の現身か、善
も悪も、是も非も、彼も此も、徹底大悟すれば夢幻、法に常住ある
ことなく、理に代謝なからざるよとなし、眼を高所につけて觀
じ來れば、さても人の心の淺きよとよ、一切妄執の念を離脱し

て、十分西天の樂土を考ふれば、光明十方を照らすを見るべし、
さりながら、世も人もみな是れうたかたの消えて跡なき假寐
の夢ぞかし、色は即ち是れ空、空は即ち是れ色、色と空と、空と色
とその差別なきよとさながら霧に包まれし海づらの、水と天
との別ちなきに似たり。
かくの如くにして人は生れ人は死し、到るとある累々として
墳墓は築かるゝなり、もと墳墓は亡き人の標榜にしあなれば、
ろを見んものは必ずや、ろの墳墓の主なる人を想ひ起すべし
苦むしたる石碑の前、花活けたる奥都城の上、香の烟りの絶ゆ
る時なく、稱名の聲いつも幽かに聞ゆるもの、みな亡き數に入
りにし人の跡を吊へばなり。昔はアーピング曾てウエストミ

ンスターの寺院を訪ひて累世の詩人の墳墓を掃ひ、喟然として歎じて云けらく。

人の無窮に活くるは多くはたゞ歴史の紹介に依るなれば、耳を経るに隨ひてやうやく暗淡に歸するもの之、されども獨り文學者が同人の間に於ける親交は、常に活潑生新に、且つ永遠直接にして衰へざるべし、而してろは自己の爲に非らずして社會すべてのために生存し、身邊の歡樂と浮世の榮華とを抛棄して、千載の人と語るべく、専心一生を暮したりき。

どかゝる感想は誰しも浮ぶ所なるが、吾人はひとり文學者のみならず、あらゆる墳墓の前に立ち盡して、いつもこの語を繰

り返さざるを得じ、而して墳墓の表示する所は悲哀なり、ろは死者の生前の言行を追懐し、ろの臨終の状況などを回想するによりてくさくさの聯想が狭き胸の裡に惹き起さるるによりてなり。

斯くの如く、墳墓は死と相伴するものなれば、死者多ければ則ち墳墓も隨てろの數を殖すものとす如何に世界の人が忌はしき死の神の手に導かれて、かの闇き冥府の國へ旅立つこと多きかよ、吾人が今示さんとする表は、最近統計にかゝり、千人に付き出産と死との對徴をなせるもの、之を見ん人は、誰しもその生死輪轉の車の小止みなく、輾りつゝあるに驚かむ。

白	佛	瑞	西	伊	奥
耳	蘭		班	太	地
義	西	西	牙	利	利
二八、五	二二、六	二八、〇	三四、九	三五、二	三八、六
一九、五	二二、六	一九、七	三〇、七	二五、三	二七、六

此表によりて見れば、死は生よりも甚きをもていさゝかろの衰れさを減ずるが如きも、佛蘭西は二二、六と二二、六なればその平均せるを見る可し。即ち芽出度しどの喜びの聲に生れ出づる嬰兒と、あゝ悲しと叫べる中に、歸らぬ旅路に出でゆくものと、その數ひとしきなり。あゝ死の神の力も亦大なる哉、かゝ

諾	瑞	丁	普	撒	拜	維	巴	獨	和
威	典	抹	魯	遜	焉	堡	丁	逸	蘭
三〇、五	二七、一	三〇、二	三七、一	三八、六	三五、九	三三、六	三二、八	三六、一	三二、八
一五、七	一六、四	一六、九	二一、九	二三、九	二五、一	二四、六	二一、七	二二、一	一八、六

國名

出産

死亡

れば山の麓、川の岸、蒼々と繁れる樺の樹の下、千草藜々と生ひたる中に、名を彫りし石碣、數知れず立ち並び、日は一日より月は一月より、ますますの敷まさりゆきて、世界の大なる曠原も果てはあとくらく累々たる墳墓にて、瘞めらるゝやも知るべからず、誰か、このところに思ひ到りて、よく介然として心を動かさざるものあらんや、昔はクレー(1716—1771)なる狂熱詩人、パツキングム、レヤイアなるストーク、ボツスの小さき寺院の墓場に詣り、慨然として謳ふらく。

Beneath those rugged elms, that yew-tree's shade,

Where heaves the turf in many a mould'ring heap,

Each in his narrow cell for-ever laid,

The rude forefathers of the hamlet sleep.

と詞何ぞ巧みなる、かしこの古きく楡の下、此處の櫟の樹蔭下、緑烟れる芝生の堆く連るところ、累々として奥都城の並べるあり、そが内には此の小村の先人ある骨を埋めて永久に茲に眠りつらめ、とはいかに悲しき言葉ぞや、一度人の呼吸のとまらば、また息することあらで、骨は幾も、歳も残るめれど、ろを包みたりし美はしき肉は、いまだ二三年ならずして早も朽ちゆくらむ、その時は富も貧も、美も醜も、老も幼も、たゞ一片の白骨となりて、在りし世の差別はあらざる可し。あゝ誰か墳墓を撫して、悵然として慨き、愁然として恨まざるものある可き、子は親を慕ひ、親は子を懐ひ、妻は夫を偲び、夫は妻を戀ひ、亡き人の此の世に在りしとども、くさくと思ひ浮べて、人目も憚ら

ず打ち泣くもあらん、おれげに人の心の美はしき極點にし
て、そを見ん人は白痴にあらざる限りは、誰しも一滴同情の涙
をそゝぐに吝かならざる可くや。
墳墓はかく哀性なれども、もし是にしてあらざれば、吾人はそ
の詩材の一部を徹去せらるゝ思ひなき能はざらん。墳墓は一
面に於いて悲哀の表示たると共に、その他面に、おきては人情
の極美をあらはすものなれば、吾人は此の世に藝術神の在さ
ん限り、墳墓は絶対に詩歌の好材料として、永へに歌人の胸の
裡より去らざる可しと信ず。

第二 墳墓と薄暮

夕暮は一日の中にて、いとも淋しく哀れなる時なり、昔より多
くの歌人が謳ひし歌はみなおれを證明せりき、欄干に立ち盡
くして故さを戀ふるも夕暮なり、破窓にもたれて身の淪落
を歎つもまた夕暮なる可し、蓋し夕暮 すべて景色が消極
的にして、有より無に近づく過渡期なればなり、晝は赫々とし
て輝きたりし太陽のいやます西にめぐりゆきて、今しも没せ
んとする時には、いまだ餘光の空を射るあれば、左までには感
ぜざる可けれど、もし一たび虞淵に沈み去りて、日はものゝ小
影より暮れゆくとき、山や、河や、野や、杜や、家や、人や、牛や、地の土

のあらゆるものは、やう／＼に見えずなりゆきて、果ては夜の
み神の天つみ空よりうち垂るゝ黒きすゝしの御幕にうち蔽
はれて、たゞ黝冥なる一色に抹し去らる可し。此の時、まの處誰
かは暗黒なる光景を見て、死を思はざるものあらむよし未だ
死を思はざるまでも人生の果敢なきを思はざるものあらむ
や、緑の色滴らん許りなりし彼方の杜影、ろが夜に入りてはた
ゞ黒ずみて見え渡るのみなる如く人の生前の偉大なる事業
も計畫も、死に見舞はれての後は、次第次第に隴ろとなりて果
てはろの影だもあらざるに到らん、さても夕ぐれの呈する景
色のうたてきあとよ。英吉利の詩人ベイン、曾てクレーの「悲歌」
を評して云はく。

朝と午時と夕ぐれとは、人生の幼時と少壯と老年とを代表
するものなり、而して夜は即ちその死をや代表すらん。また
晝と夜とは、その他面におきて生と死とを憶ひおこさしむ
可し。今クレーはまの世を去りたる人の爲めに哀詞をのべ
んとするに中り、地を夕暮のかげに占めたるは、ずあぶる適
切なるものと謂はざるべからず。もしも之れを清鮮なる朝
に取り、嚇々たる日中に取りなば、ともに適當を失したらし
ならんを……。

と是れげによく中れる言にして、夜が死を代表するとは、一般
の定説なるが如し、ひとりベインのみならず、世の多くの詩
人は、夕ぐれと死とを近接せるものとなせりき。されば墳墓と

薄暮との一致せることは、曰はでもれのづから明かなるところなる可し、吾人は以下古今の詩歌を列擧しその評を試むると同時に、如何に夕ぐれと奥都城とか、詩の中によく調和せられたるかを説かんと欲するなり。

The curfew tolls the knell of parting day,

The lowing head wind slowly o'er the lea,

The ploughman home ward plods his weary way,

And leaves the world to darkness and to me.

Now fades the glimmering landscape on the sight,

And all the air a solemn stillness holds,

Save where the beetle wheels his droning flight,

And drowsy thinkings lull the distant folds;

Save that from yonder Ivy-mantled tower,

The moping owl does to the moon complain,

Of such as, wand'ring near her secret bower,

Molest her ancient solitary seign.

こはグレイが田舎の墓地にて詠める悲歌の冒頭の一節なり、その意は夕ぐれの淋しき中に、唯われ一人ありといふに在り。あゝ何れの野寺の鐘の音か、殷々として天地に響きわたりに、あゝに日の暮れ去るを告げぬ、その時に歸牛は吼へつゝ野邊を辿り、歩は遅々として渉々しからねど心は片時も早くわが部屋に入り、四足を伸ばして憩はんと思ふらむ、耕夫は一日の労働に疲れ果て、家にかへらば愛らしき娘子とともに、妻の手料理の夕餐をば、嬉笑の間に食はんものと、鋤鍬を肩にして

ろゝろに家路に向ふらむ。その時日は早や西淵に沈み果て、
天も地も黒き夜の神の帷に鎖されて、冥闇ものゝあやめも分
たざる間に、吾はただ一人悵然として在り。やがて朦朧にかす
みたりしおれ等の光景は、一つ一つやう／＼に消え失せて、静
氣は沈々として冥府の國より襲ひきたり、その大なる無形の
翼をうち擴げて、覆載間の森羅萬象を包み藏くしぬ。おの時に
あたりてや、目にふるゝものは何もなく、たゞ聽管によりて甲
虫のさも物うげに飛び交ふ羽音と、遠き／＼彼方に丁りて、羊
鈴のかすかに響くを聞くのみ。又彼方の藁々と生ひ茂れる蔦
かつらにかげ見えぬまで覆はれたる塔樓の邊り年老いにし
鼻の世にもうれはしく淋しき光りを放てる月に向うて鳴く

あるのみわれは之が幽獨の棲處になづさひてその宿れる巢
に寇するものを訴ふるが如きを想ひ起さざるを得ざりき。
いかに淋しき哀れなる景色ぞや、鼻の啼聲はげに淋しく哀れ
なる極みなれば、たゞさへ聞きても異様の感に打たれて、もの
凄き心地せらるゝものを、若し墓場などにてこれを聞きなば
ろは一入悲しく、凄くきおゆ可し。グレイは之を第三節に置き
て、夕暮の景色を叙する最後の手段としたるなど用意の疎な
らざるを見るべし。おの歌をよまんものは、誰しも夕ぐれの景
色が淋しさ静かさが、一節よりは二節、二節よりは三節の方はる
かに甚しきを見るならん、おれグレイの詩に見る長所にて、ほ
とんど漸層にちかき修辭法ならんかし。

寒山落日立ちて巾を沾ほす

これより交遊一人少くなりぬ

線路車を停めて定めて句を題せん

花より紅き處に吟身を瘞めて

こは鱸松塘の者せし漢詩にして、友の奥つきに詣でてよみたるものなり。あゝ寒山空寂にして人の在るなく、日は虞淵に沈みゆきて一入の淋しさを加へぬ、去の時われ一人友の奥つきの前に在り立ちて吊へば涙流れて巾を沾ほすを覺えざるなり、あゝ亡き友よ、君亡せてよりわが親しき交遊は一人少くなりしなり、われは常にそを歎ちつゝあるものなるが、此處墳墓の前に來りてはいやますその感を深うせり、されども亡き

友、君は幸なるかな、今し汚れたる人世を遯れて、かの泉路に車の轍をとめて、定めて句を題するよしならん、花よりもより紅きとあるに、满腔みな詩歌なるもの面白の軀幹を瘞めて。去の詩もまた景を夕ぐれにとれり、げに夕暮と墳墓とは相離るべからざる干係あるものにして、去の以外にはあまり適當なる景色あらざる可し。この點に於いては東西の詩人、みなその所見を一にせるが如き感あり、蓋しその秋なると春なるとに論なく、夕暮とさへいはば、人は一般に寂靜なりとの聯想を起すものなればなり、而して夕ぐれの寂靜を助けて、もの瘞さまた哀れさを添ゆるものは鳥の聲、鐘の音などその最たるものならん。

髯史埋骨知る何れの地ぞや
東臺山北黄葉寺なり
寺後松楸の蒼く鬱れるほとり
忽ち認む春濤先生の字
一片の碑八字の文
寒泉掬して就る數行の涙
嗚呼絶世の大なる詩仙よ
固に知るなり詩はあれ君家の事
書香人あり名聲高し
先生すべからく泉下の醉を爲すべし
晚鐘一聲一たび頭を回らせば

雁天は蒼茫として暮色至りけり
あれ即ち戸倉稔が春濤先生を追悼するの詩にして、最後の二
句は晚鐘をうつして夕暮の寂寞を表示したるもの字句敢て
珍らしくもあらねど、その惆悵悲傷の趣は言外にあふれつゝ
あるを見るなり。また鳥聲を描き出したるものは、その類甚だ
多かる可きも、みな殆んど類似せるものゝみにて、これといふ
ほどの詩はなきが如し。
都門の健筆意は縦横なりければ
即ち是を文壇の大主盟とやいはむ
鸚鵡の賦は常に興趣を催ふし
車夫の篇はよく心情を寫したりき

あゝ山陰に閒臥しては時に酒を呼び
澤畔に吟行しては又纓を濯ぎたりき
遅きかな十年吾が字を識ること

空しく聞くあゝの新墓に鳥の悲鳴するを

是れ追吊の詩歌としてはあまりに巧妙なるものにあらねど、
新墓と鳥聲とをよく調和せしめたるにより、こゝに掲げて参
考に資することゝはなしぬ。墳墓の凄切をしてなほ一層凄切
ならしむるは、薄暮を以て最もなすべけれど、冬の夜の月かけ
鋭き折などは、夕ぐれにもまさりて悲哀悽愴の情をさこそす
のなり。

謁静女墓

平替へ源興る夢一場

憐むべし鳥盡いて良弓藏し

百戦成功歸するに家なし

數奇誰か吊ふ源九郎

満腔の衷情誰に向つてか説かむ

骨肉恩義亦既に絶つ

鐵騎何たびか度る海驛の雲

雄心更に踏む北陲の雪

美人影やせて行路に迷ふ

杳々山河夢に相慕ふ

舞袖拵けて上る鶴陵の祠

嬌聲唱へ出す縹絲の詞
哀情切々として聽くに堪へず
座客相見て涙自ら垂る
纔に虎口を遁れて猶飄泊す
征衫秋は冷かなり刀水の湄
茫々見ゆ郎君の跡
橋畔に立ち盡くして柳枝を結べば
蒼烟凄風黄昏ならんと欲す
還つて白刃に伏す川畔の村
明眸皓齒空しく黄土となり
遺跡たゞ見る古墳の存するあとを

古墳の存する六百年
鳥雀黄昏也た憐む可し
一路の西風吹き絶えず
滴露涙に和して墓前に灑ぐ
あゝこれ「しづやしづしづの小田巻くり返し昔を今になすよ
しもがな」『よしの山みねの白雪ふみわけて、入りにし人の跡
ぞ戀しき』と謳ふにつれて鶴陵祠畔舞袖を翻して舞ひし靜御
前を吊ひしもの、結末の光景を夕ぐれに探り、鳥雀西風、滴露等
を點出して、尤も妙を極む。かくの如く夕暮と墳墓との調和は、
くさくさの詩歌に於いて立証せらるゝを見る也。今何を以て
あの兩者がしかく、よく調和する乎を研究せんと欲す。

- (イ)夕暮の光景は消極的也
(ロ)墳墓は消極的也
(ハ)故に夕暮と墳墓とは一致す
(ニ)夕暮は暗淡たり
(ホ)暗淡は死を代表す。
(ヘ)墳墓は死者の標示也。
(ト)故に墳墓の死と、夕暮の暗淡との表示する所は調和す。
(チ)時に入相の鐘を聴く。
(リ)鐘聲は素より悲的也、古より無常を告ぐる鐘と云ふ。
(ヌ)鳥雀時に墓畔に啼く
(ル)夕暮は休息の時にして、人は勿論鳥雀もまた疲労の極

- に達する時也、故に何となく先を急ぐが如き觀あり、而して先を急ぐは死に近づく也。
(ヲ)これ等の聯想を起すにより、鳥雀の聲は墳墓とよく調和す。
(ワ)秋の如きは虫語を聞くことあり、虫語は昔より哀れなる聲とせり
(カ)故に虫語は墳墓と一致す。
(ヨ)夕暮は一日の終極にして、繁雜なりし人間はこれより休息の途に就かんとす、故に漸次寂寞に赴き蕭條に趁る。
(タ)墳墓は常に寂寞蕭條を表示せり。

(レ)故に此の點に於いて墳塋と夕暮とは相一致調和せり。此の他なほ多くの原因あるべしと雖も、吾人は大略右の十數項に歸せざるを得ざる也。なほ星の光、飲焚く烟、雲の旗手、などこれ等のものを列擧すれば、墳墓と夕暮との調和について、おもしろき素因を發見す可けれども、こゝには略しつ。

第三 陵墓の沿革

大古は闇の夜の如し、混沌としても、あやめも分かず、されども人智やうく、開けて社會的の組織を見るにおよび、煩はしさを避けん爲に、くさくさの掟も定められ、人と人との間の道德的關係もねごさかになれりき。陵墓のごときも、野蠻なる時代にありては、いと簡略なるものなりしならむ、或はその上加ふるものなかりしやも知る可からず、わが國の古き書籍によりて、その沿革を取り調ぶるに、神武帝以前は邈として知るべからず、されども須佐之男尊が稻田姫を娶りまして、室を清といへる所にまつらへ給ひしとなどより推考するに、死人

の葬送墓陵の建設等ありしならむ。
わが國肇道以來なべての人民は生死をもて不淨汚穢なるお
と、なしければ、産室を置きて産婦をそこに入れしごとく、人
の死せしときにも、新らたに家を作りて喪屋となし、そこには
棺を斂めて死人を安置し、酒食を供するおと生前と同じく、親
戚知人は來て誄辭を述べ、以て遺族を慰めんとするが常なり
き。かくの如くにして一定の時日を經過すれば、則ち之を土中
に埋めたりけり、又置津棄戸といふがありき、そは死する者あ
れば、死したるものゝ家族は、みな家を捨て、走り、以て汚穢を
避けんとせり、而してその回避こそ、即ちこの置津棄戸なりけ
れ。或る人の説によれば、神武天皇以後、歷代遷都の頻繁なりし

は、取りも直さず死を忌むてふこの習俗に基きしものなりと
ぞ。その葬儀は上流社會に在りては、持傾頭者、尸者、舂女、哭者、造
綿者？などありて、鹵薄行列整然として備はりたるおと、今と異
らざりしなり。また棺は木にて製したるものと、石にて製した
るものと、陶器にて製したるものと、三種別ありけれども、何れ
が最も流行したるや定かならず、よく發掘せらるゝ古代の墳
墓は大抵石造のものなりけり、而して墳墓は石を以て外廓を
疊み、棺をその中に納め、上に土を盛りて墳を築く、賞きと賤き
と身分の等級によりて墳墓にもまた種別ありき、圓形、橢圓形、
瓢形、前方後圓などはその普通なるものなるべし。既に墳墓の
成るや隆然として地上を抜くおと、幾尺はとんど丘壘の小さな

るものに似たり、而して其の周圍には土を穿ちて溝を造り暗に生人との境涯を設け、死人が生前愛したりし器財、珠玉、劍戟などをその中に合葬するを常例となせしが、甚しきに至りては君主の死亡するや、その臣妾なるものは、生きながらその扈從として墓側に陪葬せらるゝが有りけり。

曾て『日本風俗史』 緋く、氏族制の頃の墳墓の制を記したるものあり、もとより簡略なる記事にして、その詳しきとは知るに由なけれど、以て當時墓制の一斑を知るに難からざるべくや。

喪祭の儀式も婚姻のそれのごとく、大體において前述の固有の風と大差を見ず、たゞ物質的文明の進歩するに従

ひ、豪族名門やうやう奢侈を競ふの俗起り、埋葬の際死者の口裡に珠玉を含ましめ、身に錦繡を被らしむるものあり、中に就きて史上に驚くべき厚葬の偉蹟を遺したるは、筑後の人形原にのまれる驕傲なる國造磐井が墳塋にして、その高さ七丈周六丈、塋域南北六十丈、東西三十丈、石人石盾各六十枚を交へ列ねて之を周匝し、別に石もて裸躰の儉人と解部と贓物の石猪をつくり、又三頭の石馬、三間の石殿二間の石藏を營み、規模の壯大人目を驚かせり。あはもとより大豊の二國に據り、高麗、百濟、新羅、任那等の貢船を誘致せる奸猾の西戎、叛逆の賊なるを以て、一の特殊例として、一般社會の風俗かくの如きとは云ひ難きも後

蘇我蝦夷があらかじめ大小二陵を築きて、百八十部の民を發したるといふに參照すれば、年紀をふるまゝに墓陵の制漸く壯大に趣きしものなる可し。

* * * * *

是よりさき前期の中葉以降、文物の開展するに従ひ、厚葬の風起りしかば、大化改新の始め、墓陵の制を改定して、外域九尋、高五尋、役夫一千人、工事七日をもつて最となし、以下等殺して、唯々地中か瘞むるを以て、庶人の限りとなし、墓地を一定し、殉死及寶貨を墓中に藏むるを禁じ、齊明天皇の大葬に石槨を廢して厚葬の風を矯めしより、用ゐて永制となし、元明天皇の遺詔には、陵上に常盤樹を植へ、刻

字の石表を建つ高さ三尺濶さ二尺餘に過ぎず、此の前後より、諸臣の勳功あるもの亦往々墓に碑碣を立て、功績を録する風あり、次いで大寶以後親王及び貴紳は、單に官位姓名を鐫するの風生じ、後生之に倣ふ共に碑石の起源なりし也。

古はかゝる制なりしが社會次第に複雑になりゆきて、葬送の方法はいよゝゝ簡略となりゆきたるが、平安に都を遷したまひてより、詔して厚葬を嚴禁し、淳和上皇のごとくに判りては、茶毘の後御白骨をうち碎きて、之を大原野の西山に委棄せさせ給ひ、以て薄葬の模範を示したまひぬ。されば、陵墓は次第にその規模縮少して、また昔日の壯觀をどゞめず、後佛教のいや

ます擴布するに伴れて、すべての儀式は非常なる變化を賦與せられたりき。葬送のごときもまたろの中にして、遺骨を佛寺に葬送し、樹を植ゑ卒塔婆を墓標に立つるやうになりて、京都は五三味場に石碣塔婆の數しげく立ち並びつ、あはれなる法即兼好をして、ろの法衣の袖をひかへて『鳥部山の煙立ちさらでのみすみはつる慣ひならばいかにも、哀れもなからん』と叫ばしむるに到りき。

その後種々うつりかはりて、鎌倉時代には葬事を以て吉事とよび、勝事とよぶに至れり。北の方に枕をさせし死人の周圍に屏風几帳を立て廻ぐらして、燈火をかゝけ香を焚き、僧侶の枕邊にありて念佛誦經し、木造の棺の制長さ凡そ六尺、廣さ一

尺八寸許りのものに、香土器の粉を敷きつめ、その中に亡き人の骸を歛め、曼陀羅描ける野草衣打ちおほひ、遺品もともにあはせ納め、由ある人は牛車に載せ夜に入るに及んで道師呪願ろの前方に立ちて焼香し、貴所屋といふに逮りて茶毘一片の煙と化せしめぬ。やがて骨を灰中に探り、瓶子にねさめて三味堂に納れ墓を築きて一基の卒塔婆を建て、以て幽魂を慰吊せんとはしぬ、又その周圍には松柏を植ゑ、溝渠を穿ち、以て他界と塋域の差別を厳しくしたりき。

鎌倉の政權次第に衰へて、遂に室町の世となりし時には、葬儀は多く佛式にして、殆んど前期と異ならざりしも、ろの間また多少の變遷なしとなさず、坂本健一氏の『風俗史』二〇八——二

○九に此の時代のことを詳記せり。
屍躰を湯籠し上剃して棺中に納め、服具を納さめてゆるがぬやうに、高貴は朱、その以下炭粉葉抹香などにて詰め、位牌をつくり法號を授け、燈火を點し、花、茶湯、その他くさくさの物を供へ、僧徒集りて不斷陀羅尼を誦讀す。當時大概火葬なれば、ろの場を設け喪主、下火起龜以下の諸役龜前の佛事を行ひ、人々焼香を終はり棺を送りておゝに至り、三度火屋をめぐるりて讀經聲經、茶毘數縷の煙りとなし了り、遺骨は灰燼の中にまとめて之を寺に納む。ろの後七箇日の供養、百箇日、一週年三、七、十三、十七、二十五、回などに佛事ありて、百年回に至るものありと雖も、此期中葉以降時衰へ世亂れしかば、生

前の禮もなほの省略なれば、况んや葬送をや、更に况んや祭祀をや、皇親の薨去も夜陰忍びやかに行はせ給ひ、天皇築陵の事は久しく絶えて泉涌寺はろの葬所となり、樹木を栽ゑ卒塔婆をたて、墓標となすに過ぎず、若しかの朝に屍を原頭にさらし、夕に骨を疆場に横ふる武夫が幽魂にいたりては、そもく、何處の空にか迷ふらむ。
後多くの變遷を経て徳川時代となり、葬送の盛儀入目を驚かすに足るものありき。されども、その儀式今と殆んと異るとおろあらねば別におゝには記さず、肅々として鹵簿寺に至れば寺僧棺前に讀經し、引導をわたして後、一杯の土饅頭となし、また數縷の煙と化し去るもあり。かくの如くにして京都は鳥邊

野に長しへの哀れをとめ、江戸は鈴が森、小塚原などに幾千の人の骸を、空しく風雨に朽ちしめけるよ、あゝ死の風の小止みなく吹きて、何れの國の津々浦々も、里々村々も、檀那寺の墓場共同の三昧場に、石碣の數日にしげくなりまさり卒塔婆の影月に多くなりゆくなりき。

第四 死と墳墓

死は人生最大の悲劇なり、一たび閉ぢたるろの眼は、復びひらくの期あらざるべく、一たび絶へたるろの息は、再び通ふべくもあらず、やさしかりし眼差、豊かなりし頬、いつの時に、かまたもとの姿にかへらむ、名を彫りし石碑は依然として塚の上に立てれども、主人は遠く冥府の國に旅立ちて、その温容に接するを得ざる可し、手向くる關伽の水は誰が爲めぞ、供ふる手向の花は誰が爲ぞ、靈魂はよしや生きて彼の世に在さんも、骸は現在此の地に朽ちて、苔石の下空しく一片の白骨をや残すらむ。あゝ人生悲しく哀れなること數々あれど、また死にまさ

るの悲哀やあるべき。死にはくさくさあるべけれど、重なるは、一、病死。二、過失。三、他殺。四、自殺の四種なる可し。パウlsen氏は云ひけらく、『人の高齢にねよびて死するは、ろの生活の外面的に打ち勝たれたるにあらずして、内面的に必然なる終極なりけらし。されは、周囲の人々の死者を見るや、以てろの生活の職分を盡し終はりて、祖先の傍に赴くとし、死者それ自身もまた屢々上帝に感謝して、従容として去の世を逝るなり』とげに高齢におよびて人の逝くはこれ必然の結果にして、さまで歎ずるには及ばざるべし、病死には二種ありて一は悲しみの度甚だ深からざれとも、一は非常に哀れなり、その高齢の人の病死は、さきにも云ひけん如く悲傷の極とは云ひ

難けれども、早世夭折のごときは極めて哀れなる事どもなる可し。有爲の才を懷きて空しく茶毘の煙と化し、希世の智を展べずして彼の世に去るがごときは、世にまゝある例しにて、天命避けがたきは如何ともすべからざれども、吾人はいたくその薄命を悲しみ悼まざるはあらざる也。かの西の國の詩人が冷然唇を破りて謳ひけんごとく。

Full many a gem, of purest ray serene,
The dark unfathomed caves of ocean bear;
Full many a flower is born to blush unseen,
And waste its sweetness on the desert air.

の感なくんばあらず、寶珠人に知られずして永久に漫々たる滄海の底に老いぬ、洞底暗きとある清彩の藏くれ居るもの何

ぞ限らん、あゝ名花咲けども人の問ひ來ることなく、徒らに谷間吹く風に散り失せて、芬芳遂に消ゆるもの幾何ぞや。過失による死、たとへば山上より谷間に轉びて死するが如き又海中に墜落して亡するが如き、何れ哀れならざるなけれど他殺の慘酷なるには若かじ、いまだ生命をながらへて、世に貢獻するとあるあらんとするは、誰しも欲するまことにして、一人として死を急ぐものはあらざるべし、それを他の強力によりて刀劍或はろの他の兇器を以て殺戮するなれば、慘酷此の上あらぬだけ、死者の身を果敢なむこと一入ふかゝる可し。墳墓は口なく舌なければ、もの言はざるを以て、ろの累々として列べるを見れば、みなほとんど同一なる經路を辿りて、冥府に赴き

しやうに觀せらるゝなれど、若し一々悉しく之を尋ねなば、皆多少の相違あるを見出すなるべし。吾人の墳墓を撫して、いとも哀れに思ひ出さるゝは、自殺者の身の上にくろわれ、自殺せん程のものは——人の忌み嫌ふ死を自ら求むるものは——ろの心中に非常なる苦痛あらずんばあらず、かるが故に吾人は自殺を以て死の中の最も悲しきものとなさるを得じ、而してろの數はなほ少なからず、あゝ世は何處まで冷酷なるか、あはれなる人の子をして自殺せざるを得ざるまで煩悶せしむる世は何處まで冷酷なる歟。自殺なりとて、その原因には種々あれば、一概に之を悼むには足らねど、多くは季節、兩性、血統、身躰、年齢などの關係より起る

ものにして、みな一應は最もなる理類あるもの、如し、今最も新らしき統計表によりて、自殺したるもの、月別と性別を示さば左の如し。

— 墓 墳 と 死 —		月別	男	女		
一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月
二九六	二八二	三五五	四二八	四八七	四四三	四七三
一六六	一六四	二〇九	三〇七	三三五	三一二	三三一

庶幾くはまればよりて季節が、自殺と如何なる關係を保てるかを知るに足りてん、而して自殺者が自殺をなす方法にも種々あり、以て男女性情の差異の一斑を知るを得ん乎。

— 墓 墳 と 死 —		月別	男	女
八月	九月	十月	十一月	十二月
四一二	三八六	三四一	二七一	三〇六
二八七	二六四	一九七	二二四	一八三

方法	男	女
溢死	二、八二九	一、三三七
入水	九、九四	一、四〇一

仰	銃	自	其
藥	死	刃	他
五八	一〇八	二〇九	二八二
三八	九	九八	九六

今あゝの表に就いて見るに、銃死せる男は一〇八にして女は僅に九なれば、男は女の十二倍なるを見る、かく女は弱々しき性質なるを以て、銃死するもの尠けれども、入水の方法をとるものは、男九九四に對する、女一四〇一の割合にして殆んど半倍以上なり。

かくの如くにして寂莫なる墳墓には葬らるゝ也、その石碣、卒塔婆形はいづれも同じからねど、死者の紀念にとて建て

られたる目的は、みな同じきなり。噫、秋夕暮畔日斜に照らすとき、鷺鷥一聲あはれに啼き、遠寺の鐘の音空に冴ゆるを聞くもの、誰かは悲哀の感に打たれざるものあらむ。人もし悵然として英雄の墳墓を吊はん時、秋風落日心うたゝ寂しく、枯林鴉啼いて肌うす寒きとあらば、『荒林慘澹中。石馬欲嘶風。功在山留碣。威存廟挂弓。飢鴉迎祭客。走鼠骸巫童。千歲宣城道。人憐内史忠』なる高青邱の詩に思ひ到るまどありぬべし。

第五 墳墓と偉人

凡庸なる衆俗の中より嶄然として抜け出てたるもの、之を偉人とはいふなり。偉人はげに人の世の花とかや、實も種もそれより獲り得可し。されはその感化はひとり、その人の生前に於ける當時の人間に及ぼすのみにあらで、永く後世にまで及ぶべきものとす。所謂「名は千載の後までも永く此の世にあるらむ」と云ひ『千古英名青史傳』といふもの、みな是れ偉人が後世にまで、或る感化を速ぼすを謂ひたる者ならん。昔はカローイなるものあり *On Heroes, Hero-Worship and the Heroic in History* と題する講演に於いて、或る意味に於いて英雄の崇拜すべき

—— 墳 墓 と 偉 人 ——

ことを識じたりき、彼れは擾々たる百萬の人民が、徳乏しく糧缺けたるを見て、偉人英傑の之を統率するにあらざるよりは、獨り自ら發達をなすものにあらざらん、人事世道の推奨進歩は、みなあれ天が時に及びて降し給ひし智徳、并びに勝れたる個人の庇蔭のみ、一般の人類は宜しく天然の優者に服従して、その指導を仰がざる可からざるものと思惟したりき。さればその『英雄崇拜論』中に曰はく。

Great Men, taken up in any way, are profitable company. We cannot look, however imperfectly, upon a great man, without gaining something by him. He is the living light-fountain, which it is good and pleasant to be near. The light which enlightens, which has enlightened the darkness of the world; and this not as a kindled lamp only, but

—— 墳 墓 と 偉 人 ——

rather as a natural luminary shining by the gift of Heaven; a flowing light-fountain, as I say, of native original insight, of manhood and heroic nobleness;—in whose radiance all souls feel that it is well with them. On any terms whatsoever, you will not grudge to wander in such neighbourhood for a while.

之を意譯すれば、英雄は如何なる方面より見るも吾等の益友たるものなり、寔に不完全ながらも、英雄を仰ぎ視るときはそれにより獲る所尠なからざる也、英雄はげに生きてる光の泉なり、之に親近すれば、身には益ありて且つ快よし。彼れは世界の暗黒を照らしたる、又照らす光明なり、昏に點されたる燈火のそれの如く之を照らすにあらざして、寧ろ天恵によりて輝きわたる自然の光のやうに照らすものなりと云ひ得可し。彼

れは智識と剛毅と雄大崇高なる光の靈泉たるなり、此の光輝の中に在りて、何人の心か爽快に感ぜざるものあらんや、如何様にしてなりとも、暫らく斯の邊に逍遙せんことは、諸君の各まざる所なるべきを信ずるなり、との意味に外ならず、けに英雄が死後における光明は、生前に於いて放ちたりし光明と同じく、燦爛たる輝きを以て照破するを見る、夫の『死せる孔明、生ける仲達を走らす』といふが如きもまた其の一種なるべき歟。されば偉人の墳墓は偉人の面を觀るに均しかるべきなり、あわ石碣巍然として聳ゆるところ、碑文整然として彫れるとあろ、誰か千古の偉人の風貌を想到し、その功業のすまぶる大なるを思はざるものあらん、或る佛者は『衆水海に入つて一味と

なるが如く、人は死によりて平等也』といふ、以て死は人間の天爵の貴賤を打破すとの意味を唱ふるものあり、され等の説は或る一部の人の間に行はるゝ説にして、一應は理あるやうに思はるれど、傾首して誓ふればまことに其の謂はれなきを知りぬべし。パウルセン氏はその著 Grund begiffte and Principienfragen に於いて曰ひたるよしあり。曰はく、

個人は死すとも、その此世に於いて成就せる事業は後世を利益するものなり、されば彼れ自身は永くその子孫および、その國民の生活中に保存せらるゝなり。

とこれ萬古不滅の金言、たとひ身は苔石の下深く瘞められて、朽ちては跡方もなくなる可けれど、その生前に存せし功業は、

千萬歳の後までも生くるものとす、即ちその英魂や精神や、みな子孫若しくは國民の生活中に保存せらるゝものなり。ワットは死したれども、蒸汽機は世界の各國に用ひられつゝあり、パイロンは亡せしかど、その詩は永へに此の世に在り、即ちワットもパイロンも尙ほ此の世の精神界に於いて生きつゝあるなり。パイロンは曾つて謳うて曰はく。

WASHINGTON.

Where may the wearied eye repose,

When gazing in the great,

Where neither guilty glory glows,

Nor despicable state?

Yes, one,—the first, the last, the best,

The Cincinnati of the west,
Whom envy dared not hate,
Bequeathed the name of Washington,
To make man blush there was but one.

— Byron.

あゝ目を舉げて英雄を見渡せば、みな罪ある功名を輝かし、不義の榮華を衒ふものならざるは無きなり、苟の然らざるものそもく、何れの處にか在る。曰はくたゞ一人あり、前には斯の人あらざるべく、後にもまた斯の人なし、その西方のシンシン子マスに似通ふ人にて、嫉妬も豈敢て之を憎み能はんや、あゝ華盛頓の名を遺して、人をして永く世にかゝる人物たゞ一人なりしとを慙ぢしむ。とは何等痛快の辞ぞ、何等巧妙の詞ぞ、櫻

の花の咲き盛るよりも美はしく、月の桂の清く澄みたるよりも淨らけし。わが國にては小野古道の詠歌に、これと似通ひたるがあり。

執鸞上人の五百年の御忌に人々を

志のぶ歌詠むに

五百とせの昔あしぢにわけそめし

み法の跡は雪もうづまらず

と云ふが如き、五百の星霜を経たりとても、徳高かりし親鸞上人が越路にわけ入りて傳へたりしみ法は、今に逮りて依然として傳播し、白雪たどひ皚々として、積むで山河を瘞むるとのありとても、上人が法は埋むるに由なかるべし、どの意を謳ひ

たるもの、或る意味に於いては、親鸞が無窮の生命を認識したりとも謂ひ得可きか。また、

丘王墓

落盡青松百草深。鶯鷓斜日叫寒林。可怜一片西湖上。埋却英雄未死心。

のごときも、前に掲げたる詩と同じく、英雄の不死を謳ひたるものなる也。英雄はたとへば水のごとし、水蒸氣となりて其の骸は消ゆれども、心は雨となりて永へに人の世を濕ほし千萬歳を累ぬるも遂に絶ゆるあたらざる可き也。われ曾て關の西に旅行し、汽車河内を過ぎりしとき、四條暇驛より下り、小楠公の墳墓に詣でたりき、一株の楠翁鬱として茂り、緑烟をまむ

—— 墳 墓 人 偉 ——

る下に、一墓の石碣嶄然として空を衝いて建ち、後背松樹蒼々として繁れるを見、公が白馬を驅りて此處等わたりを驅けまはりて、雲霞の如き敵軍を引き受け、身は蝟の如くに箭を被り、手も足も血潮のために彩られ、進むも退くもまゝならぬ究竟に陥りつ、此處に弟の正時を喚びて、耦刺して逝きしとを憶ひて、まばしが間悵然たりき。されども小楠公の孝烈は今に人の鑑となりて、三歳の童子もその名を記憶せるを見れば、夫のパウルセンがいひけむごとく、人の事業は永久國民の生活の中に保存せられて、幾もいとせの後にいたるも、決して廢滅せざるべきを思ひたりき。

偉人の墳墓の垂るゝ教訓は永久也、一時的のものにあらず、そ

の石碣その碑文、量よりすればまことに尠小なるものなれども、それを觀ん人の胸の裡には、かの偽善者が全力を以て建設せし龍大なる石像よりも、石碣よりも、より大きくより濶き心地せられて、覺えず暗涙の襟に充つるを覺えざらしむ。風の朝雨の夕、一枝の花一杯の水、手向けなんとてみ墓の前に出でゆくもの、誰かは肅然として欽仰の念を起さざるものあらむ、景慕の情を惹かざるものあらむ。あゝ、陵墓よ、陵墓よとあれ巖々たる一塊の石一杯の土、口なければものも云はず、眼なければものも見ざれど、足ろの前を踏まんときには、自ら森嚴なる感に打たれて宛ら苔石の下に人在りて、眼を睜らして睨むがごとく、舌を揮ひて叱するものゝ如きを幻象すべし、され等はもと

より一種の神經的作用によるとは云へ、萬人の均しく感受するところもつて亡靈のとあしへに此の地に望みて、社會を支配せんとしつゝあるあとを知る可きなり。

第六 無縁塔

無 袖のふり合せも他生の縁とやら、世に縁の絲につながれざるもの、まづは趣かるべし。旅は道連れ松原つゞきの暇に日の暮れて、先を急ぐ旅人にも言ひかけ、後より寄り添ひしとすれば、おれ既に有縁ならんかし、縁とて濃き淡きくさくさあれば、穢多非人の奴輩とて親戚はあるものを、無縁の塔の主人のみは、何處にも縁のあらぬとて、心ある人の石碣うち立て、自ら求むる情の絲、それを奥つきに結ひつけて、これにて縁の出来たり、冥府にて心安く瞑れとは、さても徳ある人の志かな。有縁無縁と名は異なれども、寺の庭、共同の三味場、あまたの石碣と

無 ひとしなみに打ち並びて、時には香煙の風に靡くこともあるこそゆゑしけれ。

無 されども世に無縁の塔ほど幸なるはあらじ、祭るものもあらぬものを、憐みのこゝろ深き人の志にて、せめては石なりとも建て、その寄る邊なきさの捨て小舟にも似たる亡魂を吊ふものなれば、類まれなる、不幸見の一轉して、世に珍らかなる幸福の寵兒とはなるなり、試みに思へ、捨て置けば誰も祭祀するものなく、魂は宙にさまよひて、歸するとあるも知らざらん、無縁の人よその人、忽ちにして石碣建てられ、倏ちにして阿伽手向けられ、折ふしは美はしき花もさゝげらるれば、また一縷の香烟にも見舞はるゝなり、世には家貧しくして、父死すとも葬

送するの資なく、母逝きても祭祀の費を有たざる、哀れなるものもあるに、さりとは無縁の塔のあるじの幸なるよしよ。あれ等の塔の建設は、佛教より來りし一種の迷信にして、建設者の心の中に、或る恐怖を懐く結果、かゝるものを打ち建て、自ら安んずるものもなきに非ざれど、また一種慈悲心よりするもの少からず、何れにしても建てらるゝものは幸なるかな、陵墓や石碣や、もと一種の紀念にして、亡者を忘却せざる爲めに建てらるゝものに過ぎざれど、ろの他面に於きては、在來の習慣上、もしくは禮式上、これなきは恥辱なりとの觀念は、誰しもその胸中に浮ぶ所也、身は死してやがては朽腐しつ、もとの四大五蘊に歸るなれば、もとより墓陵のあるなきも厭はず、魂は

飛んで月のみ宮に入るなれば、汚はしき此の地の上に一基の石碣の建てられたりとして、何の輕重もあらざるべし。さりながら世は形式の世にして、人は形式の人なり、すべての人にあるものが、或る一人の人になしといはゞ、世は之を嘲り入は之を罵り、誰しもおれと齒するを恥ぢや志ぬらむ。されば寄る邊なき人の將に死なんとするや、かならず心に無念なりとの感想を惹き世の冷酷を恨み、人の浮薄を憤るなるべし、ろの刹那ろの靈魂は幾分か穢濁をなして、清淨無垢なりとは云ひ難かるべし、これ等の想ひは三寶に親炙せる碩徳といへども、起らざるはなかるべし、ましてや覺行二つながらに全からざる凡夫の淺はかなるに於てをや、さればろの魂は自ら西方極樂の

浄土に歸るあとを得て、怨靈とあしへに宇宙の間に彷徨ひて
 永く人を恨み世を怨らみ、風吹く夕べ雨ふる小夜中、燐火恍と
 して明滅するるとき、必ずもとの人身を現じて、世を呪はんと人
 の枕元に立つべし。あはまあとに信じ易き説にて誰しも理あ
 ることと觀じ、心の中に一種の恐怖心をあこす結果、さらば無
 縁の塔なりとも建てましと、僧徒かたらひてみ寺の庭に、急に
 一基の石碣を樹てたるもあらん。

如上言ふところ、みなこれ坊間に傳ふる流言、一として信ずる
 に足るものなけれど、ろの荒唐無稽の裡、半面の眞理を包容せ
 るあとの可笑しければとてかくは書き記しつ。

われ曾て北郊に散歩す、日暮れて四邊蕭條を告ぐ、たゞ花々と

して見渡すかぎり果てもなく連なれる野は緑烟やうく消
 ぬゆきて、暗黒なる夜の衣を纏はんとしつゝあり、風寂しく打
 ちわたりて、やうく枯れかゝりたる草葉うちそよぎ、簌々と
 して髑髏のなるが如し、耳を欻つれば何處の寺の鐘の音なる
 らん、殷々と響きわたりしが、やがては夢のやうに消ぬゆきて
 耕牛の聲はるかに聞えたりき。細路ゆき盡くして草いやま
 す茂り、虫語いよくしげくして、足白露を貫ぬき、悚然として
 肌に粟を生じたり。まばらくにして日はいよく暮れなんと
 し、黝冥なる色彩は草葉のかげより現はれ來れり。われは肅然
 として威儀をたゞせしが、衷心何となく淋しき心地して、やが
 ては一種悲哀なる感想を惹起したるまゝ、手を袖にして思は

ず俯向きぬ。

然るに前に横はれる一基の碑あり、題して『無縁之塔』といふ、青石の一面をや、平かにして、ろの上にその四字を彫りたれど、幾春秋の風雨にやささらされけん、いたく磨して字形分ちがたきに、やゝ黄ばみたる蔦の葉の生ひ茂りたれば、すべてが朦ろげなりけり、われは去を見てふと思ひけるは、人よ春の夜の夢の如く、海上のふたかたの如し、榮華を競ひて、夜會の席に舞踏する紳縉貴女も、時來れば茶毘一片の烟となりてその艶なる姿は消ゆるらむ、榮華はげに春の夜の夢の如きかな、名利を争ひて、十字の衢に奔走する都人市民も、機熟すれば青苔一杯の土となりて黄金も爵位も立どころに滅するならむ、名利はげ

縁

塔

に水瀝の湧きて消ゆるに似たるかな、あはれなる無縁の塔、あの下に眠るは如何なる人の子ぞ、嘗ては龍の入墨せし腕捲くりて傲岸なる木葉武士の中に分け入り、無辜の町人の苦めらるゝを救ひし者にあらざるなき乎、はた又この處古への戰場にして、刀聲砲響天地をふるひ、屍は積んで山をなし、血は流れて河をなし、社會の華を以て任じたりしものゝふの數知れざる骸累々と連りければ、ろをまつらむとて、そのかみの老いたる儉父が、打ち建てしものにはあらざる乎、草原語らず、石碯いはず、静氣は沈々として萬象を包み去り、はるかに牧笛の音のかすかなるを聞くのみなりき。

あゝ無縁の塔、ろの姿はいとも蒼古にして碣としてはいとも

無

縁

塔

けだかく、また適はしかりけるよ、茫々として果てしもなき野の一隅に打ち建てられし無縁の塔、その趣は餘りに悲的にして人の心を動かすよと甚しかりしよ、今これを觀てかくいふものと、その昔之を建てたるものと、その心に幾何の差がある、順か逆か、真か偽か、建てたる人の心のゆかしさよ、觀む人の想のけだかさよ、ゆく人かへる人、建つるもの、見るもの、前と後との差別はあれど、心は均しき平等一如、やよ安んぜよ無縁の塔の主人。

第七 墳墓と歴史

桑田變じて碧海となる世に、何物かよく依然として舊態を保たむ青しと思へる夏の山の滴るやうなる翠の色も、やがて來む秋にはから紅の色を染めて、紅葉の錦をや織りなすらむ、四時色をかへぬ常盤木の、松の緑りにかはりはあらぬ如かれど、その實歲々年々脱落してまた新たに生ずるにはあらざる乎、星の移るは物の變るを標示し、物の變るは世の果敢なきことを表示するもの也、紅顔よくいつまでかその姿を保たむ、未だ數十歳ならずして滿頭霜をいたたくべし。墳墓よく幾時ぞ累々たる石碣碎かれて土中にうづまり、皚々たる朽骨時に市井

の土中より發掘さる。あはれなるかな、亡き人の紀念にとて打ち建てられし墳墓の、それも昔の姿を保ち得ず、破壊し尽されて跡を止めざるに至る、果敢なきかな人の運命、世の行く末何時の時か吾人は安んじて眼を閉ぢ棺を蔽ふを得可き。されば墳墓を以て時代の風俗を知り得可きは勿論その頃の人情をも推し得らる。假令ば或る古墳を發掘せしに、中央に一人の白骨あり、その周圍にも數人の白骨あり、中央の白骨を圍み繞らしたりとすれば、それによりて殉死なることを知り、殉死なるを知りて後始めて、その時代の人は靈魂の不滅を信じたるが故に、従者は主人の死に當り、その亡魂に奉仕すべく、死を共にするを儀式となしたるを推測するが如き也。坪井博士

は曾て、古墳調査と人類學の關係に就きて、その意見を發表したることあり、曰はく、

饅頭形や瓢形の盛り土の或るものを見て、吾々は多分古墳で有らうとの事は申しますが、愈々といふ事は、何も證據となる遺物が發見されない中は申されません。埴輪立ての破片か、祝部土器の破片か、石槨又は石棺の部分でも見附かれば、其の塚は古墳と鑑定されますが、此場合に於ては塚の大小で築造の勞力が推測され、従つて使役せられた人夫の多寡や、夫れ等の住居した都會或は村落の事さへも、幾分か窺ひ知るを得ます。埴輪立ての調べは、當時の服裝器具等の如何を明にし、且つ土製器を焼く技術の様子をも告げます。祝

部土器の調べも、又その用法と其の製法とを示し之れが形状模様によつて吾々は古人の好尚をも推察するを得ます。石槨の築き方を見れば、築造者の勞力知識共に思ひ遣られ、石材の質を明かにして、其の自然の産地を探ぬれば、運搬に關する諸事も分かつて來る。石棺に付いても是れと同様の事が云へ、尚ほ石を彫り石を磨く術をも推して考へられる。埋藏物の最も肝要なのは、人骨であるが、その調査結果は左の諸事を明かにするのである。

- (一) 一つの塚に葬られたる屍骸の數
- (二) 葬られたる者の男女
- (三) 葬られたる者の老弱

- (四) 葬られたる者の骨學的諸性質
- (五) 骨或は齒の上に現はれた人爲變化
- (六) 骨或は齒の上に現はれた疾病又は負傷の徴候
- (七) 塚の内に於ける屍骸の置き場所
- (八) 塚の内に於ける屍骸の置き方

是れ等に關する實見上の智識は、葬られた者の人種的所屬、古今人類の骨學的異同、古代人類を冒した病氣の種類、古代人類の身体裝飾に關する風習、古代人類の埋葬に關する風習等を知るに於いて、有益であります。

* * * * *

通常の場合に於いて、墳墓を調べるのは何の爲であるかと

云へば、

(一) 或る格段な人の埋葬された場所を知る爲であるか、然らざれば、

(二) 或る格段な墓の如何なる人の埋葬所であるかを知る爲である。

され等の所説大に見る可し而して氏はこの論の結尾に於いて墳墓を調査するに誰の埋葬所なるかを調ぶるよりは、又一種の方法として寧ろ誰の墳墓とも分らざるものに付き種々の史學的觀察をなすもよしとの説を立てたり、是は實に面白い議論なりといふ可し。又大町桂月氏の『古塚』中に左の一節あり、歴史的觀察をなしたるものともいふを得可けん。

阜より出てたるくさぐさのもの見るに、おほかた碎けて断片となれるが中に、四ふりばかりの太刀の直刀なるが、鋒のかた折れて失せたれど、柄のかたは残りて、鐔もくちながら残れり。ろのつくりざま奈良の朝に行はれしものなり。あの外断片の金物多くは昔用るし馬具にして、金銀をかざりたれば、貴きものは人のもちしものなることあるし。阜のありし處にいたれば、ねほかたうちくづして、あとかたもなければ、土工夫にほり出して時のさまを聞くに、石の排列のさま、つゆ石棺の製にたがはず。さて骸骨はと問へば、壺に入れて簀子の下にありとて、指す織手も顛ひたり、とり出して見れば、おも亦碎けて片断となりたれど、頭蓋骨一つ碎けずし

て残り、齒のつきたる齒ぐきも二つ残り。その一は齒の色や、黄にして、いたくすりへらされたれば、年老いたる人のものと見ゆれど、他の一は齒の色も白く、奥齒なほ未だ發生せずして、はぐきの中にこもれるは、少年の人なるべし。膝の骨も三つ残り。骨のふるさ、千年以上のもものと見ゆるに、直刀石棺、その他のものに思ひあはすれば、奈良朝の頃、まかも貴ききはの人なるべけれど、東夷をうたんとて下りし將軍かもとの相摸の國府に近き地なれば、當時國司となりて下りし人か、今は絶えて知るよしもなし。

これ即ち、齒によりて死者の老弱を判定し、古器物によりて時代を推測し、又その貴ききはの人なりしかを考へ得たるもの

也。かくの如く所謂古墳を調査するは、實に趣味あることにして、また世の爲にも利益あるものならんかし。されども果敢なきは人の現身、世の變移、今日の古墳を調査して古の風俗を替ふるもの、明日は苔石の下に瘞められて、遠く幽かなる冥府の國に赴くやらん、明日の冥府の國に赴くもの、また何時の世にかその墳墓を發掘されて、今の時代の風俗を替へらるるやらむ。さても頼甲斐なき人の世や。

第八 比翼塚

比

戀とは男女相愛の情也。郎は婦の爲めに水をも渡る可く、婦は郎の爲めに火をも踏む可し。儻し此の身を捨てざれば相拯ひ相救ふ能はざる場合には、身も捨つべし、軀も殞すべし、郎六尺の軀幹を婦の前に献ぐれば、婦三寸の魂魄を郎の後に抛うつもの、之を戀とはいふ也。戀は永久にして衰へず、戀には詐りなし、利慾なし、况んや人目の關あらん、親も、兄弟も、金錢も、財寶も、あらゆる一切のものを抛棄ちて、郎は婦と偕に、婦は郎と共に添ひつ添はれつせんとを希ふもの也。さればたとひ幾億劫を経るとも此心は變らざる可し。もし此の世に於いて晴れて夫

塚

比

婦となる能はずば、渠等は死しても夫婦とならんとを惟ふなる可し。怒り易き郎も婦の爲めには和らぎ、悲しみ易き婦も郎の爲めには慰めらる、相依り相頼む、男と女とはさながら連理の枝の如く、車の両輪に似たり、片輪もし毀ちなばよしや、今片輪の遺りたりとて、はた何の用をか爲さむ、兩輪完ければこそ、隣々として輾りもすれ、あらざれば轆轤として廻る能はず郎と婦とありてこそ完たき戀は作り得らるれ、郎缺くるか、婦缺くるか、何れにても一人缺けなば、戀は忽ち完き形を失ひて、あはれ畸形のものとなる可し。されどもろは現在に於ける有りさまにして、二人の間の相愛し相慕ひし心はたとひ死しての後も變らざる可し。君をれきて外に女はあらじ、其許を外處に

して何處にか男あらむ、ど盟ひ誓ひし双方の美はしき情。やさしき言葉は、玉椿幾千代かけてかはらざる可し、たとひ海埋れて山となり、山碎けて海となりたりとて、日月星辰の姿を消すに到りたりとて、此の世界の愛の神の在はさむ限りは、徹底消ゆるとあらざる可き也。さても戀の頼母しきかな。

世に比翼の塚といふあり、おは相戀せし男女の死骸を合葬して、未來の夫婦を作さんと計りし者、建てられし碣や、築かれし塚や、おのづから他のと異りて、いささか艶なる傾きはあれども、悲しさはそれにも優さりて、その實哀れなる極みをつくせしものなきに非らず。

東都の地を距つるおと一里の郊外に、目黒と云ふ寒村あり、今

は交通しげくして都邑の差別もあらぬほどなれど、蒼々なる樹林緑の色をたへて自ら市塵を隔て、田畑つらなりて鄙の景色は一入美しくし。そこに祐天寺と云ふあり、やゝ古き菩提場にして傍に有名なる比翼塚あり、これ所謂平井權八と小紫とを合葬せる處にして、一基の石碣、二人の戀を守り顔に塚側の灌木時に小鳥のとまりて淋しげに打ち鳴くあり、二人の如何なる間柄なりしかは、世の稗史小説に詳かにして、今更吾人の説くを要せず、江戸の市人皆おれに詣て、男女の良縁を祈るといふ習慣をなせしが、因襲の久しき今に至るまでその風を存じ、妙齡男女の參詣引きも切らず、日々香花の絶ゆることなく、幾縷の細煙風に靡くとある、苔石の下深く情夫情婦を瘞めて

相愛の情念幾もいとせを經るも變りはあらざる可し。

均しくおれ墳墓也、されども比翼の塚は、他のそれに較べて何等か樂しきやうなる心地せらる、蓋し人の未だ全く墮落せざるや、心は一時も未來的觀念を去る能はず、死しても西方の淨土に至り、天上の樂園に遊ぶとを推想する結果、逝きての後、は、夫も婦もあらぬを辨へて、一種の迷信よりかかる墳墓に對しては、ろの主人の二人が、未だに黃泉に在りて相笑ひ相語り居るやを思はしむるによりて也。たどひおは信ずべからざる荒唐無稽なるととするも、比翼の塚はまこと詩的なるかな。小高き岡べ傳ひに、鼻謠まじり、牛を趁ふうなるが後より、一人の老爺の薪を負うて行けるを呼び留めつ、此の古塚の由

比翼塚

比

翼

塚

來や知ると尋ねけるに、老爺は怪しげなる顔して、ぢろりぢろりと、吾が顔を窺ひながら、精しきことは吾も知らず、吾等がまだ年若かりける頃迄は、標が下の比翼塚と呼ばれて、秋毎の盂蘭盆には訪ふ人もありと見え、竹筒に線香淋しげに立てるを見るよとありしが、今は比翼塚の名だに忘れられて、鳩鴉の外には誰とぶらふ者もなし、と云ひ棄て、後をも見ずに立ち去りぬ。

さては戀ひつ戀はれつ、相思ふ男女の、浮世の障礙に浮世をはかなみ、親を棄て同胞を棄て、相携へて茲に命を棄てし者か。哀れなりける戀の果てかな、はかなかりける夢路の末かなと思ふに、吾はいつしか蓬の上に仰向さまに身を横たへ、

人生の現象いつれか夢幻泡影にあらざりける、さるが中にも戀ほぞあはれに可笑しきものはなしと、浮世の果ては皆小町なりといひけん様々に品換りたる戀の本末を獨り心の中に描きつつ、果ては神疲れ氣弛みてや、いつしかうとうと、まどろむ吾が肩先に手を懸け、しづかに揺すぶるものあり。

* * * * *

胸苦しき限りなく、油のごとき背汗衣を透すを覺て、吾はふと目を開きぬ、日は既に傾き盡くして、晝だに小暗き標が下の薄明り、里遠み時求むる鳥の聲も聞あえず、空黒く蓬青き古塚の下には、昔し燃けむ戀の塊、寂として音もなし。

あゝ是れ比翼の塚を過ぎりてなせし一篇の美文にあらずや、互ひに戀ひに焦がれし男と女が世の果敢なき障礙に逢うて心を果さず、逆も此世に於いて晴れて妹背を契り能はぬならば、死して彼の世に夫婦となる可し、夫よ婦よと喚びたさ喚ばれたさに有るか無きかも定かならぬ未來を樂しみて相果てし男女を合葬せし奥都城どころの前を過ぎては、生前に二人が如何に戀ひ戀ひたりしか、また如何に世の障りの多かりしか、親兄弟の間の關係は如何なりしかなど、くさくさの空想胸に湧き來りて、満頭重きを覺ゆるとともに、死せし男女に對して寄する同情の念は、なほ一層深きものある也。

あゝもし此の世に戀が絶好の詩材として、所謂詩人に驅はる

比
る間は、比翼塚もまた此上なき歌の料として、長く此の世に存
在せん、如何に古より異しき比翼の塚なるものが、多くの小説
を孕み、稗史を胎みて、幾多の讀者と幾多の觀者との腦髓の中
に、戀の果敢なきを憶はしめ、未來の空漠たるを想はしめたる
かよ。

異
郎は妾に許し妾は郎に許す

塚
春風秋雨夢魂香はし

何ぞ知らんや一朝妾を辞して去り

飄零郎は上る斷頭場

妾が身は唯婦徳を守るあり

問はず我が郎の忠なる乎賊なるかを

比

異

塚

來つて新墓を拜す感何ぞ堪へん

願はくば墓前に殉して郎側に侍せん

白刃首を貫らぬき血紛々

滿腔の遺恨白雲に附す

孤村今に古跡を傳ふ

土人艶稱しつゝあり比翼の墳と

妾は唯々婦人の徳を守るあるのみ、斷頭臺上の露と消れたま

ひし吾が郎の身の忠臣なりしや、賊子なりしやを問ふを要せ

ざる也、たゞ願ふ、墓前首を貫いて白刃に伏さむ、とは何等の悲

劇ぞ、素より滿腔の遺恨を白雲に托し、數尺の軀幹を縷烟に附

する決心あればこそ、かゝる決斷心もありたれ、如何に郎の懐

かしきとて、自刃してその跡を趁ふがごときは、貞節太甚なるものにあらざれば能はざる所、此の詩もとより假構に過ぎずと雖、よく比翼塚の真髓を謳ひ得たるを覺ゆ。

第九 月と墳墓

昔は大江千里悵然として歌ふらく、「月見れば千々にものゝろ悲しけれ、吾が身一つの秋にはあらねど」と、げに月光の冴え渡りて山も野も家も人も、みなろの光の中に攝容されんとき、何となく淋しく哀れなる感情を牽くべし、殊に秋の夜の月かけを以て其の最となす。蓋し月光の標示する色彩は青にして、その觀照はおもに沈鬱憂愁にちかき聯念をねこすものなりとは、近來の定説なるが如し。或る人かつて月光を以て青色にあらずとせしが、月光の青なることは問はずして明かなる可し。試みに鏡を以て月光に對せしめ、その上方より斜めに之を見

れば、鏡面に映せる月光は、藍色に少許の黄色を加へたる、最も
淡きものなるが如し、元來海面を見ても青色の標示する意味
は沈鬱憂愁などのあることを知るに足らん、青色は之を紅色、紫
色などに比較すれば、常に華美艶麗ならざる表示をなせるも
のにして、るれに對すれば吾人は、或は宇宙の神秘に向つて恐
怖し、或は天地の宏大に就いて驚異する等、いづれも花を見る
らんやうなる思ひはせざる可し。そは月光は頗る廣量にして、
花の如く一山一野に限れるに非らずして、山も野も林も河も
海も、天も地も覆載間のあらゆる森羅萬象は、みな其の光輝の
爲めに照破せらるゝを以て也。

かくの如くにして月は墳墓とよく一致するものとす、墳墓に

對する吾人の觀照が悲的にしてすべての場合に於きて沈靜
なるは、殊更にいはずとも明白なるとなる可し、よつて今爰に
月光と墳墓とが、その尤もよく調和する所以のものを、列擧せ
ん。

(イ) 月光は青色也。

(ロ) 青色は沈靜、悲哀を表示す。

(ハ) 墳墓は悲哀、沈靜を表示す。

(ニ) 故に墳墓と月光とは調和する也。

(ホ) 月光に照破せらるゝによりて墳墓の或る個所に偲

影塔影などを印し、その個所は暗黒を呈するとあり。

(ヘ) 暗黒は死を代表す。

(ト) 死と墳墓とは勿論調和す。

(チ) 夜の景情は大凡濛朧也故に墳墓の如き悲哀的標榜をなせるものと調和す。

(リ) 秋の夜の如きは虫聲蛩語の、おれ等寂寞の景情を助くることあり。

(ル) 夜は人の安息するときなるを以て世界は自然、靜肅、清淨に近づく。

(ヲ) 死は宗教的觀念によれば、佛或は神に近づく可きものなるを以て、靜肅清淨なる夜景に對し、且つ身墳塋の傍にあれば、常にそれ等の聯想を起すものとあり。

おれ等はもとよりその一斑なる可けれど、誰か月夜墳墓に詣

りて、此の感而起さるものあらんや。曾て大坂に遊びて、近松門左衛門の墳墓を展す。寺院自ら市塵をへだて、清淨の氣人に逼る、時に月光雲間をまれて、天の戸わたる雁が音はいとも哀れを添へたりき。われ碣に近づきて之を見れば、『阿耨院穆矣一具居士之墓』の文字もたぼろに、うたゝ昔の文豪の俤を憶うて、悵恨の念胸中に充ちくたりき。

代々甲冑の家に生れながら、武林を離れ、三槐九郷に仕へ、咫尺奉りて寸爵なく、市井に漂うて商賣知らず、隱に似て隱にあらず、賢に似て賢ならず物知り、に似て何も知らず、世のまかひもの、唐の大和の教へたる道々、神釋儒道和歌有職、弓馬部曲歌舞、滑稽の類まで、知らぬ事なげに、口にまかせ筆に

走らせ、一生を囀り散らし、今はの際に至り、いふべき真の一大事は一字半句もなき當惑、至愚の甚しき、心に心の耻を蔽ひて、七十餘りの光陰、思へば覺束なき我世經畢んぬ。もし辞世はと問ふ人あらば、

それ辭世さる程にさても其後に
残る櫻のはなし句は

残れとは思ふもねろか埋火の
けぬまあだなる朽木かきして

と書きつけたるも、臆ろげに見ゆあゝ、淨瑠璃作者として、その名後世に嘖々たる近松巢林子、あゝに空しく一片の骨を止め

て、ろの魂早くも月宮に入りしか、夕ぐれは、一片の縷烟の立ち上り、その亡きたまを弔するもあれど、夜を深み人静まりては、風樹葉を戦がして、月かげ婆娑たるを見るのみなりき。われ此の時に於て思へらく、月と墓と、此の世に於いて最もよく調和したるもの也と、試みに古歌古詩について見れば、わが立言のさまで過誤ならざるを証するに足りてん。

渝らぬ契りの誰れなれや、千年の松風颯々として、血汐は残らぬ草葉の緑と枯れわたる霜の色かなしく照らし出だす
月一片、何の恨みや弔らむ、此處鴛鴦の塚の上に。

これ一葉女史の『別れ霜』の結尾、よく書いつけたり。けに月影婆娑として樹蔭小暗きところ、寂寞の氣人にせまりて、肌は風も

なきに何となく寒さを覺え、塔影冷やかに大地に印して、叢間
哀れげに打ち泣く虫の聲をきくもの、誰かは悽愴の感を牽か
ざるものあらん、月の夜の墳墓のさても凄切なる哉。

第十 靈供塔婆

小笹茫々として繁るところ、石碯累々として建つとある、蓬草
夏深くして人は荒逕に迷ふ、蒼鬱たる灌木時に緑を滴らして、
満目烟を簇すがごときところ、卵塔婆のかげを認む、打ちて倒
れんとするものあり、新たらしくして記したる文字の明らか
に讀まるゝものあり、或は既に半ば折れて立ち半ば地に委す
るものあり、或は鶯かづらの爲めに締められて、暮夏の名残り
を惜しむもあり、鳥聲五六遠近に聞え、赤蜻蛉一二笹の葉の
上を飛び反りて未だ憩まず、風吹きわたれば樹の葉がさくく
と鳴りて、何となく腥き心地す、日は照らせどもいと力なく、白

うして輝かざること雨の日の如し、一天晴れたれども時に片雲の飛ぶあり、雨やはらめる、風落つるごとに冷いやりとするに、氣分いと悪し。あゝ此の累々たる石碯、擾々たる塔婆、これ誰が爲に、何の爲めにうち建てられたるぞ、死者の紀念にか、はたまた祭祀の標榜にか墳墓は寂靜として答へず。眼を轉じて見れば、碯前花を活け水を供したり、あゝ何の爲めに手向けし花ぞ、何の爲めに供へし闕伽ぞ、名花徒らに腥風に褪せて、濃紅の色空しく消ゆ、清水果敢なくも狐狸に吞まれて透徹の液一滴をとめず、虫語時に叢間に弔憑の意を表するのみ。

死者は靈なれば、食はず吞まずして而して天國に在り、何ぞ花

を手向くるを要せん、何ぞ水を供ふるを須ひんや、又何ぞ立派なる石碯華麗なる鐵欄を設くる要あらんや、ろの之をなすは重もに一種の迷信と誤解とより來る。されども佛教家の泰斗高田道見師は説いて曰はく。

位牌とは位の牌と云ふおとにて、存命中の官位と姓名とを書きつくる木札なり、元來佛説には無きことにて、儒家の式なれども、今の世には佛家にも之を用ひ倣ふおとはなりぬ。此の札に神靈を託し憑らしむるの意に出づるが故に、位牌とも名づけたるもの也。然るに位牌の臺座を蓮華の形に作り、屋根を宮殿の形に作りて如何にも佛法らしき物に作りたるは、全く日本に於ける儒佛合併の風儀なるのみ、然る

に今は殆んど佛法の専有物とはなりぬ。次に靈簿乃ち過去帳も固より佛教に出でたるものには非ず、唐の戒禪師が天子の勅を奉じ、一ヶ月三十日へ三十佛を配當し、首めの朔の日を定光佛とし、晦日を釋迦如來に終はり、之を記して毎日禮佛を爲さしむるより起りたるものなり、此の佛名を彼の靈簿に記載することは是れに基きたるもの也、而してろの靈簿は、誰れの始めたるものなりやは明瞭ならずと雖も、蓋し由來久しき寺檀の關係厚き事とはなりぬ、箇様なることは幾久しく世に盛ならしめ度きことなりと思ふ。

靈供を調ふることは、蘇婆呼童子經の佛説に基きたるもの

* * * * *

なれども、位牌の前に具ふる事は、儒禮に倣ひたるのみ、位牌に亡靈の託しあるものにはあらざれど、先づ位牌を看板としてろの亡靈の主に通ずるの標準を定めたるに過ぎず、而して人多くは靈供の減せざるを疑ふものあり、されどもろは減するの道理なし、何となれば中有の亡靈は尋香とて、一切飲食の香を以て食とす、故に何を供するも、ろの品物は減せざるなり、減せざれども亡靈の之を受けざるにはあらず、譬へば蜂の華を採るに但その味ひのみを取つて、その色香を損はざるが如きものなり、且つ起世經の中には段觸思識の四食を説かせられてある故に、粒米水草の如き物質のみが食品となるには限らず、心の上には思想識力が食となり

眼や耳の爲めには見聞が食となり、身軀の爲には衣服寒暖及び男女の觸欲を飽滿せしむるも食となるべし。故に口には粒米水草等の如き分々段々になり居るものが食となる。然るに彼の亡靈の如きは、中有の微細なる五蘊の身心を受け居るものなるが故に、勿論この麤相なる五蘊の身軀を受け居る人間の段食を食すべきの理由あるおとなし、同じ人間社會に於てすら、その境遇を異にすれば、衣食住に至るまで、みな之を異にす、况んやその境界を異にせる中有の亡靈、何ぞ人間の食するか如き食をそのまゝ食するの道理あらんや、然るに之を彼是と疑ふものあるが如きは、愚の最も甚しきものなり、されども中有の衆生が香氣を以て食とする

おとは、佛祖の説なるが故に、靈供のごときは成る可く香氣の澤山にある甘味のもの、及び清淨潔白なるものを手向くるを善しとす。その他山海の珍味を供するにも、成る可く新らしきものを撰ぶべし、彼れ既に香氣を以て食とするものなれば、箸や御膳の形様は無くとも、宜しかるべきなれども、孔子の謂ゆる、神を祭るおとは神在すが如く、死に事ふるはなほ生に事ふるが如くせよ、と云ふの意に出でたる人情的（日本風）の誠を移したるのみ。

* * * * *

次に卒塔婆建立の功德は、實に廣大無邊なるものにて、之を一本建立すれば、一躰の佛像を造るに當り、二本造れば二躰

の佛像、三本造れば三體の佛像を建立するの義に當れり。昔し日藏上人が冥府に遊ばれたる時、延喜帝の幽勅により、千本の卒塔婆を造りて、帝の幽苦を救ひ給ひし事など、元享釋書に書き残されたり。今ま京都船岡山の麓に千本と云へる名稱の、今日に残れりと云ふ。それは千本の塔婆を供養したる所なるが故ならん。或は七本塔婆が七人の僧と現じて、人を助けたりとの談もこれあり。塔婆を五輪にするは、人間の五輪(空風火水地)を表し、又は五智五如來を表したる意味深長なることあれども、それを解釋すれば、ながくなるが故に、今はあれを略しぬ。要するに亡者の追善を營むに塔婆の供養をするは、莫大なる功德のあるものなりと信じて、立てれ

ばそれにて、善し。
荒唐無稽信すべからざる個所ありとは云へ、此の理また信ずべきとあるなきにあらざる。要するに所謂關伽の水や、手向の花や、卒塔婆や、石碁や、みな此れに殆んど近き理由を以て打ち建てられしもの。風雨幾春秋、花咲いて散り、散りては咲き、月照りてはくもり、朦りては照り、變移廻轉まばしも止まざれども、墳墓は依然として到る處にあり、天下を擧つて皆ろの無形の力に化せられ、有形の量に充たさる。されども北村透谷は叫んで曰はく『悠々たる天と、邈々たる地の間に孰れの所にか墳墓なるものあらんや、その之あるは人間の自ら造れる者也、國民の自ら造れるもの也、印度自らその墳墓に埋もれたり、羅馬自ら

その墳墓に沈みたり。彼等は去れり然れども彼等を葬りし墳墓は、彼等と共に其の影を徹したり、天下孰れの處にか墳墓なるものあらんや、世界は墳墓に赴むくにあらず、頭を擧げて蛇行するがごとき此の世界は、遂に「生命」に達すべきもの也。「記憶」渠たゞ記憶のみ、過去「渠たゞ過去のみ、未來」には權あり、希望に「は命あり」と、儻し夫れ眼を廣く放ちて、かく觀じ來らば、過去現在未來は今宇宙の所有物にして、人間の私有する所にあらず、豈孰れの處にか墳墓なるものあらんや。されども暫らく吾人は此の天地に踟躕して、未だ全く現實を離るゝ能はず、勿論理想界に身を措く能はず、人を葬りし墳墓に對しては、その墳墓たることを思ひ、悲傷愁憂仲々として禁ずる能はざる、具象的

思想界のものとならん。

第十一 墳墓と詩人と

累々として連れる奥都城どおろの、いたく人をして歎かしむるあとよ、世を捨てし法師の身にすら秋の夕暮は淋しかり、まいてや亡世にし人を葬りし跡の、もの思はしむる種となるは、怪しきまどにはあらざらん。詩人は此の點に於いて、その極致なり。詩人は世の軌道を脱して多趣なる横逕を歩みつゝ、あり、正しく造りたるくろ金の道を輾るを好まずして自ら進んで細き曲りたる、むら／＼と草の茂れる野路を歩むを好むもの也。されば、その意志は或る意味におきては、太た冷靜なるものありと雖も、まかも一度感情の激することあらば、詩人の

渾身こと／＼くこれ血と涙とを以て充たさるゝに非ずや、而して血と涙とは恒に詩人の内心を襲ひつゝあるに非ずや、一時も感情と相離るゝ能はざるに非ずや、片時も理性の念に束縛せらるゝを肯んぜざるに非ずや、自ら好んで理に遠ざかるを好めるものに非ずや。さればその墓場に詣りし詩人の感慨は、重に悲傷にして、墓の主人を哭するに非ずんば、その遺族を慰むらんやうなる心なり。若し然らずんば墓場に對して、渠は同情を表するものなり、その以外に於いて吾人は墓場に對する詩人の觀想を發見する能はざる也。

墓場に對する同情とは如何に、それは奥都城に對して、世を憤り人を罵り、ひたすら亡者の身をなつかしむか、または其處に平

和のあるまを稱し、富貴の輩、貧賤の士、一たび棺桶に足を踏
み入れては、またその差別あらざるを謳ふかの二也、前者は墓
の主人を懐ひ、後者は墳墓そのものを想ふものとす、されば前
者は狭くして後者は濶し、これ等の感慨は其の要素より次第
々々に派を分ちて錯雜知る可からざるくさくさの感情を惹
き起し、十人十種の諺のごとく、人の心の差異によりて、其の感
情もまた相違し、秋野に咲ける花の一つ色には匂へども、その
種類の千々に分るゝが如きものあり。
田園に在る近世のかくれたる詩人は、曾て墳墓を撫して謳ふ
らく、

我身一つを保ちかね

定めなき世のねもかけを
見せて漂ふ浮き雲の
空を眺めつさまよへば
いつしか來る薄原
山の裾より吹き來る
風に悲しき調べあり
盡きせぬ長き響きあり
茂れる薄かさわけて
迎ればそこに墳墓の
一つ淋しく立てりける
瘦せたる手をばさし伸べて

撫づれば怪し我が胸に
無限の思ひ湧き来る

と是れろの冒頭也、作者は更に歩を一轉して、その感慨を叙したり、言々句々あとくく血涙を含み、最後より逆りて中間にいたるまで、墳墓に對して平和を抒ぶるとある、なかく趣味深し。

「やよおくつきよ汝はしも

胸に文字をば刻まれて

闇と光のその間に

何時の世よりか佇める

我は此世に生れ出て

早くも闇に立ち迷ひ
塵にはむせび風に泣き
人の心の情なくて
涙にもろきをの子とは
いつしか吾はなりにけり
春夏秋やはた冬の
四時の景色を夢と見て
東の空にあかくと
昇る朝日の光より
夕の影を喜びて
草葉の上になく露の

永久の平和のあるとある
生命の泉わくとある
愛と自由の住むとある
我が持物と誇りたる
わづかの智恵と力をも
人を恨むる心をも
悪魔の前にぬかづきて
あけぐれ日ごと罪をかす
弱き小さき心をも
穢き土に投げすてゝ
汝の下に入るまでは

うすき光を眞とし
人の心のやみ路をば
迎りて年を経たりけり
此の世は闇かさりながら
神より受けし己が身の
我れは泪を揮ひつゝ
なほも闇路をたどらん
躓く石のあらばあれ
陥る谷のあらばあれ
汝の立てる下こそは
われのゆく可き所なれ

我は忍びて水銀の

杯とても受けもせむ

氷の刃受けもせん

朝な夕なに泣きもせん

修辭の巧なるにあらざ、按排の妙なるにあらざして、何となく捨て難き神韻あり、漂渺として誦ずるに足るものあり、蓋し墓所を以て、生命の泉の湧く所となし、憂、自由の在る所となし、更に進んで、光明の輝く所となすが如きは、實に異彩を放てる觀察なりと云はざる可からず。

やよ奥都城よ

人には見ねぬ我が胸に

深く刻られし文字を見よ

未だめぐる血のゆるやかに

ひしく太鼓の春の海

憂世の風を知らざりし

熨せしがごとき我が胸に

刻られ初めにし文字を見よ

『苦痛』と深く刻まれし

動きて止まぬ文字を見よ

然れどもつらき此の文字も

汝の下に行かむ時

夢の如くに消え失せて

『平和』の文字の現はれん
あゝ墳墓よく
堅く冷く醜しき
汝に言葉あらねども
親しく我に語りたり
眞實を我に語りたり
偽善の赤き狐火の
闇路に迷ふ旅人を
賺し感はず今の世に
汝に逢ふの嬉しさよ
聞けや此の世の夕暮れを

告ぐる野寺の鐘の聲
見よや時にかへりゆく
翼重けの群鳥
いざ我とても歸らなむ
草踏み分けて歸らなむ
悲しくつらくある時は
またも汝を尋ね來む
あれ即ち墳墓を撫して、あれに語れるとある、奇想天外より落
下せしかを疑はざるを得ず、而して現今の汚穢せる世を罵詈
して『偽善の赤き狐火の、闇路にまよふ旅人を、賺し感はず今の
世』といふとある、作者の心情思ひやられて痛快也。而して作者

は結尾として左の四句を附したりき、

名残り惜くも立ちあがり

途を急げばざわ／＼と

薄吹きまく夜嵐の

陰府に誘ふ聲すこし

詩は素より情緒的なるが故に、理を以て責むること能はざれば、敢て此の詩に對して批難を試むるものに非ず。されど墳墓を以て平和のある所とするは、詩人に非ずんば許容すべからざるところにして、乾燥なる哲理の道途を辿る人は、必ずやそれを排斥するならん。蓋し墳墓は石碣の大小をあれ、一旦亡者のおゝに葬られては、貴賤貧富賢不肖の差別なきに到れば、

かゝる感覺は起さるゝなれとも、その實偉人がなしねきし事業、詩客が遺しねきたりし歌文、均しく後世に貽りて、永くろの人の紀念となり、且つその表証たり。試みに左の記事を見よ、こは近刊の米國雜誌に載せられたるもの也。

偉大なる詩人の恩澤は曾て此の世に在りにし時のおとく、精神上に於て後世に逮ぶものなるが、こゝにまた物質上の恩澤を後世に貽す一條の物譚を有れ、セキスピアの誕生地に來遊するもの、一年の總計二萬六千五百數十人にして、一人六ペンスの金を拂うて見物するが故に、一年間の總收入は六百六十二ポンド餘に達する勘定也。またセキスピアの遺骸を葬りたるホークリツリコチー寺院にては、ろのナ

ヤーチヤードに参拜するものより、観覽料を徴收するを以て、一年の收入實に五百七十五ポンドを超ゆると云ふ。あの記事は以て吾人の立言を証明するに足れり、げにろの骸は死するとも、靈は永久に存在するものなれば、事實に於いて墳墓は平等なれとも、理窟に於いては差別あり、平和、平等多少の差異はあれども、その意味或る點に於いて一致せり、吾人は夫のポウルゼン氏が『倫理學』に於いて曰ひけんごとく、墳墓は死者の標示なれば、亡者の事業が、子孫國民の間に繼承せられつゝある以上は、依然として平等ならざるを見る也。

赤門派の詩人、晚翠は謳うて曰はく、

死と悲と恨との

跡をとらむる墓の上
美と喜びと命との
心を示す花一つ

○

光あけぼの來ん年月
望の影を彼は見せ
暗夕まぐれ過ぎし年
涙のあとをこれは見す

○

色ある花の聲や何
聲なき墓の意味や何

同じあしたの白つゆを
彼と此とに落ちしめよ

○

夢の墓は人のあと

命の花は神のわざ

同じ夕べの星かげを

彼と此とに照らしめよ

これ即ち墓上の花を謳ひたるもの、辞藻流麗にして、讀過の際
些の凝滞を覺えず、想像豊富にして、聊か新生氣を帶べり。げに
墓は死、悲、恨の跡をとめて、永へに惆悵の念を刻ましめ、ろの
上に咲きたる花は、美、喜、命の心を標示せり、前者は飽くまで憂

鬱にして、暗、夕暮、過去といふやうなる跡をのよし、後者は、光、曙、
未來ともたたへつ可き希望の痕を印するを見る、その喜と、悲
とを配し、闇と光と、朝と夕とを排したるが如き、いとも面白し。

見渡す野邊の

れくつきの

苔の下には

誰かねむる

戀に焦がれて

二人して

抱合へるも

あるならん

世を果敢なみて

自らを

殺せし人も

あるならん

罪を犯して

その罪に

身を果せしも

あるならん

まだ世も罪も
 知らざりし
 稚きものも
 あるならん
 富みて榮えて
 徒つらに
 失せにし人も
 あるならん
 ふりさけ見れば
 大空の
 月の光りは
 冴えくくして
 涙のつゆや
 そくくらむ
 あはれどころは
 照らすなれ
 こもまた墓畔に於いて起る可き感慨の一也、静寂なる墳墓に
 對して、その主人の誰なる可きや、如何にして身まかりしや、如
 何にして葬られしや、おれ等の疑問は不言不語なる石碣の前

に佇みて當然ねこる可きうたかひなりけらし。おれと均しき
 意味のとをグレイも亦謳ひたりき。
 想ふ此の無聞の地に埋まるの人
 或はその胸に天火の焰々たりしものあらん
 或はその臂一たび揮うて
 四海を動かし得可きものもありしならん
 或は錦心繡腸能く鬼神をして
 感動せしむるを得たるものもありしならん
 * * * * *
 一片稜々たる剛岸の骨を揮ひて
 御黨の權威を碎きたる田野の

ハンブデンの如き或は此處にあらん

歌はず吟ぜず名の聞ゆる

ミルトンの如き或は此處にあらん

血を濺がざるクロムウェル

それに似たる人或は此處にあるならん

かくの如く死者の何ものなりし乎を想像するまとは、實際墓
畔に於いてあり得可きと、熱情を有し血涙を濺ぐに吝ならざ
る詩人が、墓地を展してかゝる推想を逞うするは、寧ろ正當な
る義務也といふを憚らざるべし。

第十二 墓畔の感慨

石碣林のどく累々として立ち並び、藁々たる小笹生ひ茂げ
りて、歩むに人の脛を没せん許り、碣に彫れる文字も明かなら
ず、その後には半ば朽ちたる卒都婆樹てられて、吹く風にゆら
／＼と揺げるもあり、新らしきは墨淡々と筆細に『法迦羅婆阿
經曰廓然大悟得無生忍奉修大施餓鬼一會者爲貞信大姊十七
回忌追善精進菩提寶塔也』と記し、その上部には梵字もて讀み
難きとを書い付けたり。遙か彼方には二旒三旒の白旗の、ひら
／＼と翻りつ、うち樹てられし竿の先に吊したる提灯を掠め、
鳥一羽何處よりか來りて、哀れげに鳴けるなど、何れも行人の

腸をして寸断せしむ。人もと有情の動物、誰か同種族の亡逝を以て悲哀の極となさうらむや、墳墓に對して感慨を起さるものあらんや、ナザレの聖人はその昔盜賊の爲にさへ祝福を禱るを吝まざりき。ましてや世に功勞ありし人、よしやなからずとも悪事を貽さうりし人の墳墓に詣りて、何者かよく介然として人生の前途を思はざるものあらんや、悲觀するものは人の生命の朝日に消ゆる白露よりも果敢なきを歎くべく、樂觀するものは世の中の、梢に咲ける花よりも美はしきを喜ぶならん。死とはいへども、未來を樂しむの餘裕あらば、何ぞ必ずしも果敢なむを要せん、生とはいふものゝ、死を憂ひ恐れなば、何ぞ必ずしも樂しとのみ言はむ。生や死や、もと是れ小車の廻

るに似て、うつせみの人の世に小止みなかる可し。されども悟るが人の眞ならば、世はみな擧げて偽りの人のみなるべし、死を悼み、墳墓に對して悲むは、まことに見れ人情の極美、會者定離、生者必滅とはいふものゝ、釋迦も擲揄陀羅姫に別るゝに中りては、鸞離鳳別の恨に勝はず、秘かに御袖を泪に沾ほし給ひき。さればこそ人の墓畔の感慨もくさくさあるなれ、いでや古の歌人、今の詩人のものせし詩を蒐めて、墓畔如何なる感情をや起しけむ、を查へんとは思ふなり。

死は悲哀の極なれども、骨肉の親の死にまさる悲哀はあらじ、されば墓畔にねける悲傷愁忡もまた骨肉の親の墓畔にねける悲傷愁忡の情に過ぐるはあらざる可し。

きみが墓場に	黄菊あり
きみが墓場に	榊あり
草葉に露は	しけくして
重からずやは	ろのしるし
何時か眠を	さめ出で、
いつ歸り來む	わが母よ
紅羅ひく子も	益良男も
みな塵埃と	なるものを
吁覺め給ふ	と勿れ
吁歸り來る	こと勿れ
春は花咲き	花散りて

君が墓場に	かゝるとも
夏は亂るゝ	螢火の
君が墓場に	飛べるとも
秋は淋しき	秋さめの
君が墓場に	灑ぐとも
冬はま白に	ゆき霜の
君が墓場に	凍るとも
遠き眠りの	ゆめまくら
怖るゝ勿れ	わが母よ

これ藤村子の『若菜集』中に收めたる母を葬るの歌、詞何ぞ巧妙なる情何ぞ信實なる、一人よりなき母に分れて、誰か依然とし

て姿を崩さるものあらん、丈夫尋常の事に涙は溢さず、と意
丈高になりて歌ひし漢詩人も生みの母に死に別れては、兩眼
の涙止めもあへざりき。され人情の極美、母の死に丁りて泣か
ざるものは人間に非る也。

飛鳥。明日香乃河之上瀬。石橋渡。下瀬。打橋渡。石橋。生靡留。玉藻
毛叙。絶者生流。打橋。生乎爲禮流。川藻毛叙。千者波由流。何然毛。
吾王乃立者。玉藻之如。許呂臥者。川藻之如。久靡相之。宜君之。朝
宮乎。忘賜哉。夕宮乎。背賜哉。宇都會臣跡。念之時。春部者。花折挿
頭。秋立者。黄葉挿頭。敷妙之。袖携。鏡成。雖見不厭。三五月之。益目
頬染。所念之。君與時々。幸而。遊賜之。御食向。才騎之宮乎。常宮跡。
定賜。味澤相。目辭毛。絶奴。所已乎之毛。綾爾憐。宿兄鳥之。片變孀。

朝鳥。往來爲君之。其草乃。念之。恭而。夕星之。彼往此去。大船。猶預
不定見者。遺悶流。情毛不在。其故。爲便知之也。音耳母。名耳母不
絶。天地之。彌遠長久。思將往。御名爾懸世流。明日香河。及萬代。早
布屋師。吾王乃。形見何此焉。

これ即ち明日香皇女のかくれさせ給ひし時、その夫に在す忍
壁皇子が、一人さびしく皇女のみ墓を訪はせ給ひて、悲歎に沈
ませられしを見て、柿本人麻呂が詠みし歌、句格變化に富み、同
情の感溢るゝ許りなり、こは素より墓畔に於ける、自己が直接
の感慨にあらねど、かゝる感情の牽起さるゝは實際上多きこ
とに屬す。

假令碑石影像に奇巧を尽くすとも

須臾も玉の緒を回す便なけむ

追尊また何ぞ冷塵を喚び起すを得んや

諛辞また何ぞ枯骨を慰むるに足らむ

こはグレイの悲歌中の一節、既に塵土となりたる死骸に對して、追尊したりとて何を喚び起すことを得ん、また如何に諛辞の限りを竭すとも、争でか枯骨の耳をして慰藉せしむることを得んや、グレイは世の偽善の士、競うて墳墓を装ひ、石碣を飾るを諷刺罵詈せしものゝ如し。

君にさへにも曰はざりし

わがあの思ひ争でわれ

汚れ果てたるうつ蟬の

あの世の人にかたるべき

吾は嬉しきあの心

胸におさめてまづかにも

ひとり墓にと入りつべし

いとも小暗きその墓に

あれ田山花袋子の『小暗き墓』と題する小韻文、句短しといへども、その謠ふ所甚だ大ならずや、君にも告げがたかりし此の秘密、いかでか汚濁の世に語るを得可き、われは唯小暗き墓場に入りて、三昧場裏端然として亡者の魂に告ぐべきのみ、墓を措きてはその他に、唯一人語るに足るものあらぬ也、とは實にやさしき心にして、墳墓に對する作者の觀念の一斑を窺ひ知る

とを得ん。

昔へに

ありけむ人の

倭父幡の

帯解き替へて

廬屋ふせや立て

妻どひしけむ

勝鹿の

真間の手見名が

奥都城を

あゝとは聞けど

槇の葉や

茂くあるらむ

松が根や

遠く久しき

おとのみも

名のみも吾は

忘れなくに

反歌

—— 慨 感 の 呼 墓 ——

吾も見つ人にも告げむ勝鹿の

真間の手古名が奥津城所

勝鹿の真間の入江に打靡く

玉藻かりけむ手古名しぞ思ふ

—— 慨 感 の 呼 墓 ——

『萬葉集』中の挽歌は人情を穿ちて、天真の流露せるもの多し。おは山部の宿禰赤人が、勝鹿の真間の娘子の墓前を過ぎりて作りたる長歌にして、景慕追懐の情甚だ切なり。その真間の手古名の奥柳は此處らと聞けども槇の葉の處せきまで生ひ茂りて、見はざるを恨むといふ一節は言辭裝飾せざれども、詩想自ら外に發揮して讀誦する者をして覺えず落涙せしむ。又これ等悲傷の念を別にして、墓畔に在る人の心を推測しも

しくば、その亡者との關係の如何を譬へたるものあり、これも
奥都城に於ける一種の感慨ならんかし、乃ち左に掲ぐ。

あはれは同じ墳塋累々として、香烟絶えてはまたつゞき、西
に沈みたる夕陽、一帶の暮雲に殘照をとめて卒都婆の文
字なほ明らか、刀稜に似たる冷風肌にしみて、人を招く尾
花の下に餌をあさる狐の聲のいと冷やかなるに、年まだ若
き女の、丸鬘に結ひたる髪もみだれ、袖に千行の涙を湛へて
新らしき墓標の下に跪づくは、もろこしのいくさに夫を失
ひたる寡婦にやあらむ。霜を戴ける老人の、珠數つまぐりて
卒都婆の前に拜むは、ろの子の菩提を吊はむとにや、見るも
の聞くもの、一として斷腸の種にあらざるはなく、ものすこ

くもまたいたましくも、坐ろに人をして無上の感に堪はざ
らしむ。げに薤上の朝露跡易くして、黃公の酒壚永く愁を添
へ、鳥邊山の烟常に絶はずして、北邙山上、唯松柏の聲を聞く。
あはれ人生は夢か幻か、一犁の春雨に油々として萌芽し、一
陣の秋風に蕭々として搖落す。非情の草木だに、天地消長の
氣運を免るゝと能はず。紅顔よく幾時ぞ、黃梁一炊夢は忽
ち邯鄲の枕に破れ、榮華一瞥、魂はむなしく黃墟の山に迷ふ。
悼むべし、天地の形を委すること未だ久しからざるに、天地
の和早く已に破れぬ。墓牌の大小は以て功德の大小を表す
るに足らず、髑髏また争てか妍醜を辨じなむ、已んぬる哉。

辭句流麗にして、比較的讀者の感情を惹くゝと大ならざれ

ども、墓吟の感慨として其の前半はやゝ目新らしき観あり。これ大町桂月氏の『墓吟の秋夕』と題する美文、一誦の價ありといふ可し。

古への益良をのこの相きほひ
妻問ひしけむ葦の屋の
うなひ處女の奥柳を
わが立ち見れば永き世の
語りにしつゝ後人の
偲びにせむと玉矛の
道の邊ちかく磐かまへ
作れる家を天雲の

そきへの限り此の道を
行く人ごとに行きよりに
い立ち嘆かひわび人は
音にも泣きつゝ語たりつぎ
偲びつぎ來し處女等が
あくつき所ろ吾さへに
見れば悲しも昔思へば
* * * * *
古への小竹田男子の妻問ひし
菟會處女の奥都城ぞこれ
語り繼ぐからにもこゝぞ戀しきを

たゞ目に見けむ古しへ男

右は田邊福麿の『過葦屋處女墓時作歌』にして、弔慰の念うたゝ切也、葦屋は攝津の國に在り、昔し此の歌中の處女をゆんとて、和泉のちぬ男攝津のうなひ男二人相争ひしかば、處女は遂に身を水中に投じて死したりき、その弔魂歌として、將た又ちぬ男、うなひ男を思ふの歌として、懷古の情いと深きものあり。又墳墓に對して厭世的觀念を牽起するまどあり、こは誰しもよく起る所に於いて、大悟底に徹するほどのものに非ざれば、墳墓の前に於いて平和歡喜の念などを牽くこと能はざる可し。せめてその墓にもとていて立つ、五月雨のかきくらしたる日なり、山麓なるふる寺の側に、あたらしき墓標たてり、世に

もうるはしかりし花の少女は、その下に横はれるなり、あはれ、白骨をはかなみし人はや白骨となれり。昨日のうつゝも今日の夢とさめぬ、今日のうつゝも、また何時の世の夢とさむらむ。われ黄昏にたちてありし事ども思ひつゝくるに、ほのかなる夕月、忽ちあらはれ、爛漫たる櫻花もあらはるゝかと思れば、死にしと思ひし少女も出て、我を招く、招かるゝまゝにたどり行けば、少女のかげ忽ち消えて、陰にこもれる山寺の鐘の音悲し、『古塚』

これ等は墳墓に對して、人生の須臾にして蜉蝣を天地に寄するものなるを歎き、今日人を吊ふの人、明日は人に吊はるゝ運命の果敢なきを叙し、はたまたわが身の沈淪、多病、多苦なるを

歎息するもの、何れにしても憂愁、悲哀にちかきペッサミステツ
クの觀念なりとす。

The boast of heraldry, the pomp of power,
And all that beauty, all that wealth e'er gave,
Awaits alike th' inevitable hour;
The paths of glory lead but to the grave.

(Thomas Gray)

あゝ藩閥の貴尊、權門の勢威、美婦の榮華、富豪の驕豪、いづれも
みな無常の風に誘はれざるはなからむ、光榮の路、向ふところ
は、たゞこれ墳墓あるのみとは何たる警句ぞや、惟ふにグレイ
死を以て平等となし、生前の富貴も、美妍も、勢威も、死によりて
悉く消滅し、他の貧賤も、醜汚も、無勢力も、遂に一に歸すること

宛ら河水の海に入りて一味となるが如しといひしものなら
ん、而してその中一種厭世的觀念を寓して、人生の果敢なきと
を謳ひたり。

嗚呼曰仁 別我而逝兮
十年于今 葬茲丘兮
宿草幾青 我思君兮
一來尋 林木拱兮山日深
君不見兮 宵嗟峨之雲岑
四方之英賢兮 日來臻
君猶胡爲兮 與鶴飛而猿吟
憶麗澤兮歎歎 尊椒醒兮松之陰

其れ王陽明が自己の妹婿にして而して自己の弟子たる徐愛を祭るの文にあらずや、字々句句、惆悵愁恨の念を含み、頗る追懐の情を逞うせるものあり、讀みてその書中の人となるが如き心地するおとなきに非ず。

玉の緒を断ちて黄泉に行かんとするとき

誰かは名残りを惜まざらんや

なつかしき此の世を去るに臨みて

何人か戀々として後顧の念なからざらん

魂の骸より離れんとするや骨肉を想ひ

其知之説分聞不聞 道無間於隱顯兮

豈幽明而異心 我歌白雲兮誰同此音

眼の瞑せんとするや惜別の涙に堪えず

墓の下に尙ほ「自然」の聲の喚ぶあり

冷灰塵土とむくろは朽ちても

なほ情火の伏すを見るらむ

嗟噫吟人よ汝今名も無き人を弔うて

かくも其の榮はえなき身上譚をなせど

何ぞ知らん汝も亦いつか此の故人の

跡を追ひて黄泉の客となり去らんとは

その時に於いて同情の士ありて

また汝の運命の如何なりしかを尋ぬるものあらむ

* * * * *

寄語す得意の人々よ
渠等故人の墳塋たふきどよろには
寺内妙音頌歌の聲唳れいとして響く邊り
記念碑の高く聳ゆるが如き壯觀あらざるも
之を以て故人の不徳となす勿れ
共にグレイの作にして、一は人生の果敢なきを歎き、一は故人
に對して同情を表したるもの也。けに此の詩にもある如く、僞
善の徒競うて墳塋を飾る世の中なれば石碣の大小は以て墳
墓の主人公の公德の大小を想像するに足らず、垣柵の高低は
以て苔石の下に瘞められつるものゝ事業の成否を論ずるに
由なし、記念碑高く聳ゆるとも何をか爲さん、塋域たとひ數十

町にわたるとも何をか爲さんや。一基の破碑、一杯の土、小は小
なりと雖も、低なりと雖も、若しその葬られたる人にして價値
あるものならば、誰しもその前に唾する者はあらざる可し。大
理石の碣雲を衝いて、巍然としてるば立ち、くろ金の拘欄三匝
して周圍を、繞らしたりとて、主人公にして欽仰するに足らざ
るものならば、誰かその前に額きて、禮拜を施すものあらんや。
墓呻の感慨はこれらの聯想をおこし來るを以て、多くは悲的
にして、如何にしても不平に傾き易き弊あるを免れず、古より
の詩題を見るに、みな其の傾向を有し居るものゝ如し、おは免
る可からざる事にして、吾人は寧ろその理りなるを稱せざる
を得ざるを信ずる也。

明治三十四年一月十八日印刷
明治三十四年一月二十日發行

編輯者兼
發行者

佐藤儀助

東京市神田區錦町二丁目六番地

印刷者

大野喜六

同麴町區飯田町四丁目卅一番地

印刷所

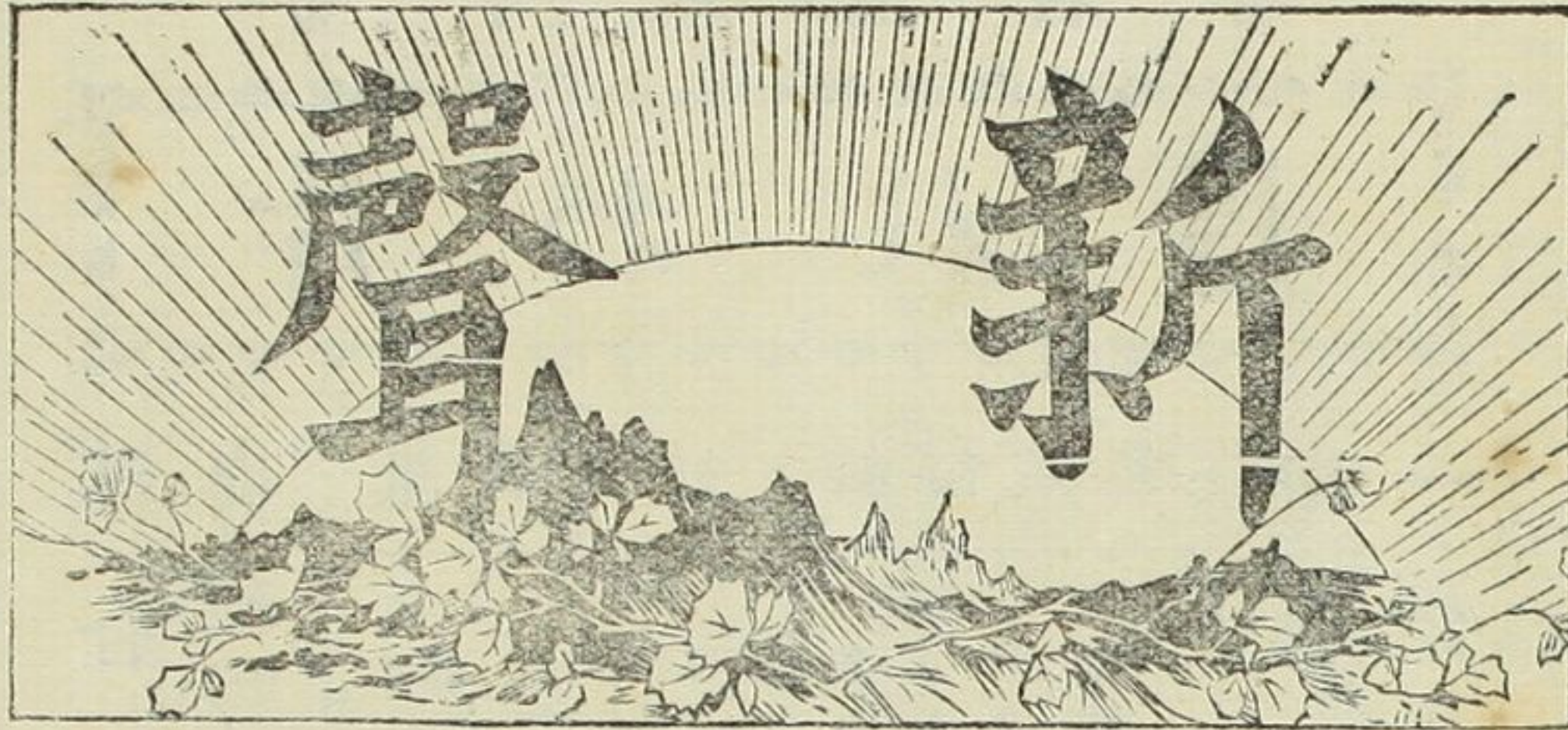
成功堂

同麴町區飯田町四丁目卅一番地

東京市神田區錦町二丁目六番地

發行所
新聲社

青年文壇中之堅



新聲は文學美術兩界に大雜誌なり。掲ぐる所、韻文、雜錄等、『主張』欄は、社中同人の虹霓の氣を吐く所にして、文藝小觀、社會時言の二に分つ。『人物』の女士月旦と、文壇風聞記は、他に比を見ざる可からざる者、一は森嚴の筆當代の名家を評論し、一は文壇の奇譚珍話を網羅す。『餘材』の甘言苦語には、覆面の武者長刀を揮うて辻斬を試むるあり、言、文學美術社會演劇の各方面に亘りて百人百様の觀察、亦一代の奇觀也。其他の諸欄皆青年文士の熱血になり、一篇一章三誦に價せざるはなし。而、美術的趣味を鼓吹せんが爲め、して本年よりは大に、美術的趣味を鼓吹せんが爲め、穂、其他新派畫を毎月十數面を掲げ、且泰西の名家の筆になれる繪畫名畫又は我古代の繪畫を寫真銅版に製して出し、間々文、滿紙、舶來の光澤士の肖像を載す。一卷約百頁、紙を用ゐて印刷を鮮明にす、内容外、旭日の天に朝す文壇を横行邁歩し、文學雜誌中發行部數多きと第一に至れば偶然に非る也。

定價 一部拾貳錢、六部六拾六錢、十二部壹圓廿錢、郵稅一部一錢〇、每月一回十五日發行〇

著 君 園 薰 子 金

月 れ わ 片

紙 質 良 好 * 裝 釘 頗 美

落 合 直 文 君 序
大 町 桂 月 君 序
與 謝 野 鐵 幹 君 序
(訂正再版出來)

著者徒爾に歌はず、歌へば乃ち吟腔鳴り韵致亮劉として盡くべからざらむとす。著者が名、江湖に騒喧せられて、其歌一々定評あり、此に懸疣の言を呈するに忍びず。唯信す、滿壑の松影、水に落ちて、一禽雨を呼ぶの夕、燈を別り梧に凭りて、静かに其詩句を味へば、益する所、管に神靈を清うするに止まらざるべし。一卷の「片われ月」所載和歌數百首あり、美文十數篇あり、情致穩約にして筆力雄麗以て近時詞壇の標靈とすべし。

中 村 不 折 君 畫
結 城 素 明 君 畫
一 條 成 美 君 畫
(寫眞銅版印刷)

定 價 廿 五 錢 郵 稅 四 錢

「墳墓」は絶好の詩題に非ずや

單調なる文壇、正に此奇書なかる可からず



新 案 製 版
定 價 廿 錢
郵 稅 四 錢

本書は、人生の平和靜安なる安息所とも云ふ可き墳墓に就いて、種々の方面より觀察を下したり。章を墳墓とは何ぞや、墳墓と薄暮、陵墓の沿革、死と墳墓、墳墓と偉人、無縁塔、墳墓と詩人と、墳墓と歴史、暮畔の感慨、比翼塚、月と墳墓、靈供塔婆の十二に分ち、精細奇警の觀察、流暢典雅の筆致讀者をして感極つて涙滂沱たらしむる者あり。殊に比翼塚と無縁塔とは雙つ乍ら美文の極粹金聲にして玉振なるもの、墳墓と薄暮及び月と墳墓の二章は、何故にそのよく調和する乎の疑問につき一々古歌古詩を例證として立論し、議論精緻一讀の下首肯するに吝ならざる可く、其他の諸篇、皆苦心慘憺の餘に成るもの、もと危然たる大冊子にあらざるも、慥に世の流行を趁うて出版する雜書と異なり、趣味饒多なると殆んどろの比類を見ざる可し。

新聲社編輯局編

創作苦心談

定價貳拾錢
郵稅金四錢

凡ろ一藝一業に秀づるもの、必ずや常人の夢想せざる苦心あり、解牛の徒、承蜩の輩と雖も、其道に達せるものは、其言以て師となすに足る。况んや名を騷壇に立て、一篇一章常に讀書界を動す人の、苦心に至りては、後進のまさに縉に書して三省す可きものにあらざや。本書は露伴、柳浪、水蔭、宙外、魯庵、鏡花、風葉の諸子を始め、當代知名の文士に就いて親しく其苦心談を聞き、以て一書を成せるもの也。文章についての苦心談あり、材料の蒐集についての苦心談あり、或は批評家に對する氣焰あり、文壇に對する抱負あり、作物中の人物に關する談話は興味最も深く、作者の經歷談亦深く味ふべし。小説美文の筆を執る人は勿論、志を明治文壇に寄する人は必ず一本を座右に置く可く、明治文學史を編する人に在りても、少なからぬ裨益あるべし。

無名氏著 ● 山中古洞君表紙畫

新刊



第一 總論	第七 雨……
第二 海……	第八 雪……
第三 山……	第九 霧と雲
第四 草木……	第十 露……
第五 天象	第十一 雜種
第六 風……	第十二 鳥獸
	第十三 色相論

全一冊

定價郵稅共
金貳拾錢

巍峨たる山、澎湃たる水、天は渺邈として無數の星辰を懸け、地は寥曠として百二の山河を載す、春秋代謝して花月の觀、未だ盡さず、風雨調和して禽蟲の聲、遂に老いず、是れ實に自然の一大美觀に非ずや、若夫れ萬斛の吟思凝つて筆を忘我の靈瑛に驅らむとするの時に至ては、我は六根汚濁の人の子にあらずして、既に自然の龍兒たらんとする也。著者は筆の奇矯と識の博該を以て名を當代の文壇に馳する者、自然に吟嘯する茲に幾年、詩の眼光に映じて種々の觀察を恣にし、此を『自然美觀』と題して梓に上す、均しく自然の靈瑛見たらむ者は、請ふ讀過十襲して其の價值と興味とを玩把咀嚼せよ。

新聲記者編

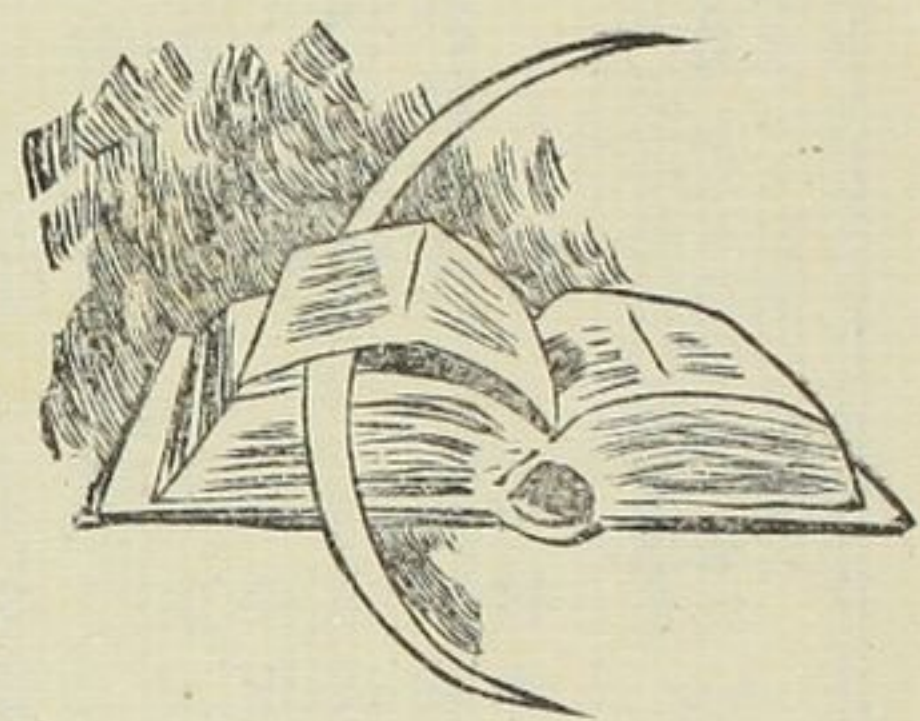
弦月

青年文集

全一冊洋製

定價二拾錢

郵税金四錢



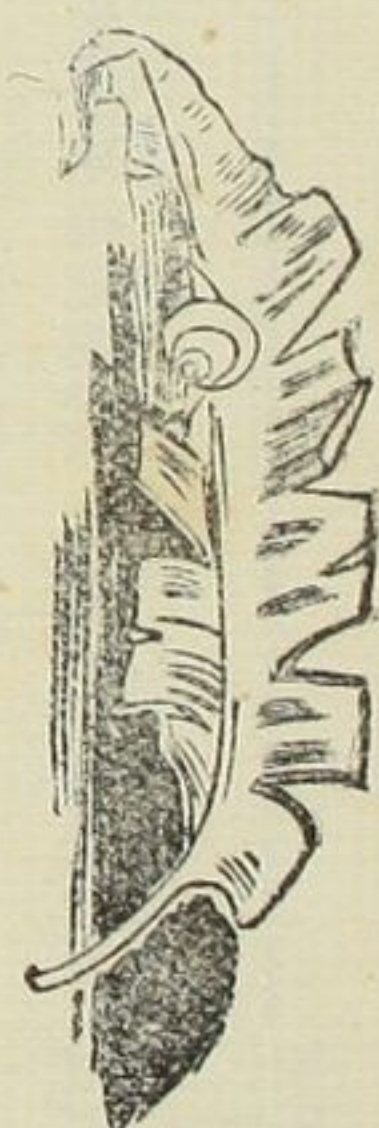
青年文士の作を集めて『弦月』を編す。襟むるさころの文、無量數十篇、江湖俊髦の筆に成れるもの、美文あり小説あり、隨筆あり、一篇ごとに趣味饒多にして詩境自ら新脆、之れを譬ふれば、秋葉水を蘸して奇香雨に濡ふが如く、浴梅櫛を撲つて冷艶風に瘦せたるが如し、『弦月』は近時文壇の珍寶を以て自ら許すもの也。

月蓮風蓮

國府犀東君著

國府犀東君 豪宕矯健の筆と、縱横四面の才を負ひ、夙に一代の奇俠兒を以て稱せらる。本書は君が雜著を集めたるもの、世を嘲るの涙あり、自然を歌ふの聲あり、一字一淚、一句一血、興趣楮端に逸飛し、韻聲縹緲として終に盡くへからざらんとす、一卷悉く是れ三嘆九誦の出色文字。

(定價二十五錢、郵税金四錢)



白露集

中村不折君書
下村爲山君畫



文學士
文學士
文學士

久保天隨君合
淺野馮君著
戸澤姑射君著
(三版)

ろも觸れなば碎けん白玉のうち、に清き涙をつゝみて、天地の萬象をうつすものは露にあらざや。白露を以て名とせる此集は、やがて戀や、無常や、運命や、人の世のあはれの數々を、あらはして刺すなし。人生の運命を知らんとする者は此集を見よ、自然の奧秘を叩かんとする者は此集を繙め。若しうれれ其文に至りては、誠に當代の絶品、艶麗豪宕悲慨、皆其妙を極めて、一語一句鏗然耳に徹し、渙然目を奪ふ。美文に志を寄する者の机上、殊に此集なかる可からず。寫眞銅版に刷して巻中に挿める不折爲山二子の畫は雕心鏤肝の餘に成りて、錦上花を添ふるもの。今回訂正第三版發行す。

美文壇之絶品

總クローズ金文字入○定價參拾錢郵税金四錢

大町桂月君著
文學小學觀
第三版

女壇落莫、人皆大
町文學士が英姿
爽、文學界を横
し、當時を懐ふ、
書は實に子め文
的論文を集め、
心注いで、半生
在り、論の新文
雄、加ふるに、
が如き同情を以
す、文字自ら生
あり。

次 目

狂熱の性拍其れ季ののの者さ
笑言質案放人活裸日本得措嗜好告大詩歌
○東貴詩内○二日學體文天詩化文○分
都族と神地日本三主我江者情の情○
の文學と神居の則我沈戸の情○
壇を○喻と詩形を評の學の質讀悲詩
去る才○詩と論○味○研究術○青同○
の○民讀す文明馬と道時○國○
乏の書○冷詩會琴門道代小語の短學○
滑格樂寫狀義の戸德○滑孔○
稽の文危則評と少陋滑孔○
の方學○言○十則評と少陋滑孔○
○士學○則主と去學馬詩

●錢四稅郵●錢拾參價定●



著者妖
堂居士は
いなる人ぞ下
に列記せる諸文士の
風采逸話學殖等人の知

らんさ
欲する、す
べつの内幕談を
忌憚なく暴露して刺
すなし、無味砂を噛むが
如きものなかりて、
書社に在りて、眞に比を求む可からざる者なり。

文壇風聞記
露伴。紅葉。逍遙。鷗外。櫻痴。篁村。綠雨。眉
山。柳浪。南翠。魯庵。四迷。宙外。天外。鏡花。風
葉。水蔭。浪六。麗水。漣。乙羽。澁柿。
花袋。學海。抱一庵。得知。嵯峨の屋。三味。
松葉。廿三階堂。弦齋。思案。
芳。秋濤。天囚。霞亭。幽
青軒。秋渚。枯川。
蘇峰。蜀南
碌堂。短川。桂
月。嶺雲
標牛

大日本文章學會編
文章形容辭典

文章の基礎は實に形容語に在り。常に之を豊にして満腹便々、時に應じて筆端窘束するの虞おらしむ可からず。本書は古今の文學書類より出所正しき形容語を集め、題によりて分ち、順に従つて次第し、難解の句には一明細なる註解を附せるなど、用意極て親切也。若し夫れ机上常に此書を友とする時は、形容の辭句に苦しむとなく、意味不明の文字を挿みて、文意を害するが如きは断じてなかる可き也。

文科大學教授 文學士 芳賀矢一君校閱
大野洒竹君序 沼波瓊音君著述

俳諧音調論

全一冊 定價郵稅共
洋裝 金貳拾錢

俳句は十七字の最短詩形なれば一音一字の關する所極めて大、まさか其音調を正うして、内容と副はさる可からず。而も從來音調の研究を試みしもの誠に寥寥、著者大に之を慨し、深く古人の説を參考し、廣く音韻學語學等を尋ねて、俳句音調の研究に資し、以て本書を著はせり、説く所極めて平易、條理又整然、一目瞭然たるを得せし。

評釋叢書

全部 六冊
六冊帙入定價郵
稅共一圓四十錢

著者は昔斯道の名家、流麗暢達の筆を揮うて難解の好句を解し、詞章の巧拙を議し、其思想を論じ、作者の精神を發揮す。世上の翻譯、講義類と同日に談すべからず。

文學士 久保 天 隨 君 著 (第四版)

漢詩評釋

壹編

定價 廿錢
郵稅 四錢

文學士 久保 天 隨 君 著 (第二版)

漢文評釋

貳編

定價 廿錢
郵稅 四錢

評釋叢書

文學士 阪本 四方 太 君 著 (第二版)

俳文評釋

參編

定價 廿錢
郵稅 四錢

文學士 内海 弘 藏 君 著 (第二版)

國文評釋

四編

定價 廿錢
郵稅 四錢

文學士 淺野 馮 虛 君 著 (第二版)

英文評釋

五編

定價 廿錢
郵稅 四錢

文學士 久保 天 隨 君 著

古詩評釋

六編

定價 廿錢
郵稅 四錢

評釋叢書

青年文學叢書

編一 文學攻究法

編二 美文作法

編三 美學大要

編四 論文作法

編五 韻文作法

編六 青年と文學

米文學士 江藤桂華君 著

全部六冊完成

青年文學叢書の著者は

文學を専攻して、三文學に精通す

青年文學叢書の文章は

流麗にして暢達、趣味極めて饒也

青年文學叢書の所説は

平易にして明快一讀直に解すべし

青年文學叢書の目的は

能文健筆の士たらしむるにある也

青年文學叢書の体裁は

美ならざるも質に過ぎず中を保つ

青年文學叢書の定價は

極めて廉、今の出版界に比を見ず

全部六冊 五拾貳錢

一部拾錢◎郵税各二錢

川岡嶺雲君 著

嶺雲搖曳

全二冊 定價四十錢 郵税六錢

九版品切、目下十版印刷着手中也。

新聲記者編

若葉集

定價拾五錢 郵税二錢

青年文士の作數十篇を集む、叙記、叙情、評論の諸篇、皆特殊の面目を持して、他の摸す可からざるものあり、明窓淨机の友とすべき也。

左記の書籍は品切にて、一部を止めず、遺憾乍ら御注文を謝絶す

扇頭小景 花ふゞき

春風秋聲 新躰詩集

青年文叢 二葉集

翠嶺白雲 雅正軒詩話

文注

書籍注文の際は書名冊子
號數等を明記して所定の
定價郵税を添へらるべし

會照

を要する時は三錢切手を
封入するか又は往復端書
を以て其旨申込まるべし

書狀

書狀の文字は最も明瞭に
書せらる可し文字の不明
なるは相互に失ふ所多し

券郵

切手代用にて拂込まる、
時は二錢又は一錢切手に
て必ず一割を増さる可し

文章通信教授

我國に於ける作文教授法の不完全なるは、中等の教育を受けたる者の作、なほ破格不法讀むに堪へざるもの多きを以て知るべし。是れ學界の大缺點たるのみならず、延いて邦家の文運を阻害すること實に少からざる也。本會は此必要によりて起りたるもの己に二ヶ年の歴史を有して基礎益々固く、生徒天下に滿ちて志望の一端に達するを得たり。講師及び學科は左に掲ぐる所の如くにして、苟くも作文の資料となり、研究の參考となるべきものは、悉く網羅して些の遺憾なきを期し、文章の添削は丁寧懇切以て生徒をして斯道の濫奥に通せしむ。

◎ 東京市神田區錦町二丁目六番地 大日本文章學會 ○

文章作法	文學士久保天	新 聞 學	除 齋 生 口 述
修 辭 學	文學士内海月	日 本 文 人 傳	江 藤 桂 華
日 本 文 典	文學士杉 敏 介	英 文 評 釋	江 藤 桂 華
審 美 學	文學士十時 彌	日 本 文 章 史	松 本 道 別
國 文 評 釋	文學士大町 桂 月	故 事 釋 義	大 沼 鶴 林
漢 文 評 釋	文學士久保 天 隨	熟 語 分 箋	大 沼 鶴 林
國 文 解 剖	文學士内海 月 林	文 章 漫 話	山 川 芳 則
漢 文 法 解	講 師 大沼 鶴 林	明 治 名 家 文 粹	本 會 編 纂
言 文 一 致 辨	帝 國 大 學 小 林 柳 村	新 選 美 辭 類 纂	本 會 編 纂

規 則 書 往 復 端 書 申 込 め 矣